鑑定備考 日本陶器全書

大正二年歳在癸丑立秋

小大路大観題

巻二

鑑定備考 日本陶器全書卷之二目次

鑑定備考日本陶器全書卷之二目次終

鑑定備考 日本陶器全書 巻之二

大西林五郎編纂

伊賀

伊賀燒

伊賀阿山郡丸柱村に產する陶器を伊賀燒といふ。此の地四面山を以て圍まれ北方近江甲賀郡信樂と山脈相連續し、土質もまた能く信樂と相似たるを以て、丸柱陶器の中古以前のものは、信樂のそれに酷似せる砂器なりき。

口碑に曰ふ、丸柱窯は天平寶字に創起し、中世廢絕したるを、享祿の頃、次郎太夫、太郎太夫の兩人之を再興す。と延喜太神宮式に伊賀國より神酒二缶を每年二回太神宮に獻ずる式あり。此の酒を盛る缶は、此の地にて造れるものにて、延喜の天平寶字に後るゝこと百四十餘年、當時尙ほ此の窯ありしことを徵

丸柱窯

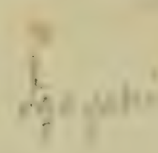
遠州伊賀と藤堂伊賀

すべし。又或家藏する所の手爐は、頗る奇古にして、器底に昌泰二年石山寺の七字を彫せり。昌泰二年は延喜元年に先つこと僅に二年、是れまた一證たり。工藝志料に、建武年間伊賀國にて始めて製出す、とあり蓋しその建武といへるは、古伊賀と稱する末茶壺なり、尾張破風窯製のものと甚だ相似たり。破風は卽ち建武の頃にあるを以て、此の古伊賀の器物をも、建武の創起となすものゝ如し。前述の昌泰の製器も、表釉略ぼ相似て、唯坏質堅剛ならざるのみ。然れども、建武の昌泰延喜を距ること四百三十年、建武より享祿に至る又百九十年この間果して幾變遷を經たるや、未だ知るべからざるなり。

伊賀燒の較々系統的に稽へ得べきは、寛永以後とすべし。寛永十二年藩主藤堂高虎、京都の工人孫兵衛、傳藏等を召し、茶器を造らしむ。當時點茶家小堀政一、己れの欲する所を此の地の工人に敎示し、以て茶器を造らしむ。其の諸器みな肉薄くして精巧なり。後世之を遠州伊賀と稱し、藤堂の指揮に成れるものを藤堂伊賀と稱へ、以て之が區別を爲せり。共に世に珍賞せらる。

今日の伊賀燒は、丸柱の三十餘窯以外に、玉瀧村の槇山、玉瀧、河合村の石川等にも之を產出せり。而して丸柱は多く原土を殿白及南出に取り、釉料を下出に求め、槇山窯は天保十二年丸柱に傚ひて創起し、玉瀧と石川との兩窯は明

伊賀焼の銘印

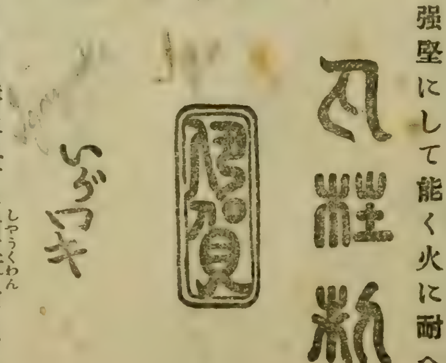


古伊賀の特徴

貫乳　ひゞ焼の如く割目に似たる細かき模様のあらはれたるもの火入又は罅入とも書く

治の初年を以て開始し、何れも其の質信楽焼に類し、强堅にして能く火に耐へ庖厨用具を製するに適せり。

寛永以後の伊賀焼には、多く下に記せる兩印の一何れかを押せり。個はいづれも銅印にて藤堂高虎の與ふる所のもの、丸柱の陶工岡本定八、同定五郎の家に藏す。藤堂伊賀は、土味やはり土のやうに見え、石を湯に沸したるやうには見えず、時代若くして古伊賀のそれには及ばざる如し。



古伊賀は寛永以後のものにて、瓢箪、水指、花入などは殊に世に賞翫せらる土細かくして堅く、地土は薄赤みにて、間々白き所もあり。こげ萠黄もあり。こげの多きを貴しとす。茶入には白き梅花皮出でたるに、青き薬のなだれあるもあり。これを極上品となす。古伊賀は元來呂宋、又は南蠻焼に模して造れるものなれば、その上作に至ては、それ等と間違はるゝもの多し。されど、仔細に之を見分くれば、伊賀は小貫乳にて、音やはらかに光澤うすく、呂宋は貫乳あらく、音かたくして光澤佳きを見る。此地の新次郎作の茶入又は茶碗は、高臺上より高臺内は白茶薬又は淺黄薬にて、小貫乳上作に出來あり、世の珍重す

る所なるが、新の字又は新次郎の彫印を附せり。その新の一字あるが故に、往々新兵衞作と誤ることあり。この外、古伊賀に就て心得べきかど二三を左に記すべし。

鼠色うすきが上品なり。

藥の白もえぎに紫交れるは善し。もえぎ藥のなきは惡し。

筒水指は稀なれども、樣々の形あり。大かたは耳付なり。伊賀、信樂、備前は一體耳あるよし。

古伊賀に足あり、これは惡し。足とれたるも疵ものなり。

古伊賀は花生、水指に限れり。茶入は利休時代以後のものなり。

利休時代より始まれる茶入は、黒藥、飴藥とも瀬戸に似たり。

伊勢

伊勢には兩大神宮の祭式に用ふる土器の調製は、兩神宮遷座の時より既に行はれ、安東燒、萬古燒亦世に名高きを以て、記すべきこと少からず。以下順次之を記さん。

兩大神宮祭式土器

内宮外宮

七門の窯

垂仁天皇の御宇、大和笠縫の里より、天照大神の御正體を伊勢五十鈴川のほとりに遷し奉る。之を內宮といふ。雄略天皇の御宇、丹波比治眞名井が原より豐受大神を伊勢山田に遷し奉る。之を外宮といふ。此の兩宮に捧げ奉る朝夕二時の御膳、三節の神祭などに用ふる土器は、伊勢多紀郡有爾鄉より調進せしめられ、今に至るまで絕えざることは、世の洽く知る所なり。有爾は一に有貳に作り、今の明星村のことなり。

此の土器を作るものを陶內人、土師、物忌、長宮物屋などといひ、祝長淨門豐門、北闕門、小門、姬ヶ門、薗門、大門などの七門あり。其の末葉今にあり

て、土器の御用を勤むるなり。古は都て三百六十人、その內頭分十人、副方二十人なりしが、永祿の頃二百八十人に滅じ、天正十九年の頃より二十四家に定まり以て今日に及べり。此等のもの丶土器を造るには、身を淸淨潔齋して、都て不淨を禁ずるなり。

天正中下有貳村と上野との間に領論起りける時、有貳七門の黨信長の檢使に抗して、太く信長の怒に觸れ織田勢の爲に黨中悉く燒き拂はれぬ。天正十二年豐太閤國司北畠信雄を尾州淸洲に改易し、蒲生氏鄕をして北畠の後に据え、神宮領の政務をも、氏鄕に取らしめたるが、時北勢の亂未だ治まらざりしを以て土器師の飯料七十石を寄附したるのみにて、善後の道を講ずるに至らざりき。天正十七年亂平げる後、更に七十石を加へ、有貳鄕土器師の飯料百四十石と定められたり。

兩宮に奉る土器の數は、古來毎年三千八百と定められ、之を土師御器と稱することは、神宮雜例集に載する所なり

安東燒

安永天明中安濃川の上流(塔世川ともいふ)、愛宕山の西麓に設けたる窯にして

古萬古

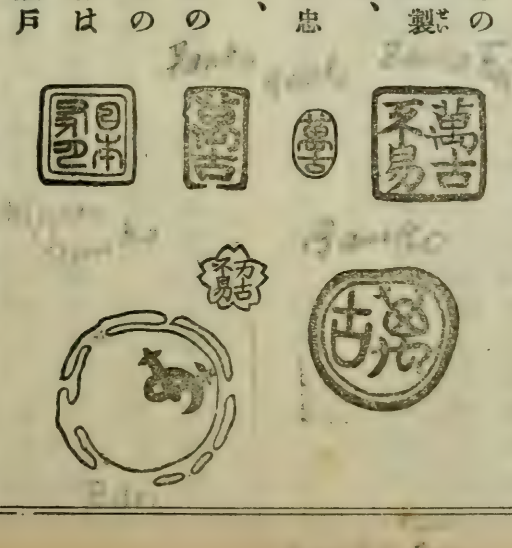
服部十左衛門なるもの、燒物師良助に命じて、愛宕山の土石を取りて、西洋風を模し、鉢皿の類を燒かしめたるものなり。然るに、間もなく休窯し、復た興らざるは遺憾とす。この休窯に就ては、此の地津の市街に近く諸人遊宴の場所となり、妓婦などの輻輳するに妨げられたる爲めなりともいひ、或は安東の二字、東を安んずるといふ意となり、關東にての沙汰よろしからず、遠慮したる爲めなりともいふ。

萬古燒

萬古燒は、元文年間桑名の豪商沼波五左衛門始めて之を製す。五左衛門點茶を好み、樂燒を造るに巧にして、交趾或は阿蘭陀の彩色釉畫を善くし、其の製眞に逼る。窯を今の三重郡朝日村小向に設け、多く之を作る。然れども五左衛門元來工人にあらざるを以て、價を求めて之を製せず。愛翫者あれば之を頒つに過ぎず。天明六年五左衛門幕府の命を奉じて、今の本所小梅に卜居し、薩摩小罍器に類する釉面に彩畫を着せる一種の陶器を作り、萬古の印を欵す。一時世に賞翫せられ、其の器今尚は存す。後世江戸萬古又は古萬古と稱するものは是れなり。五左衛門陶法を子孫に傳へず、僅に一代にして廢絕せり。

萬古の款印

天保二年桑名の骨董家森與右衞門有節といふものあり。性土器を好み、陶法を巧みて、樂燒等古人の器を摸造し、遂に小向の地に一窯を起し、無釉有釉の酒茶器を造り、尋で浮起書及び淡紅彩料を案出す。當時他に此の彩料なきを以て、大に稱讚を得たり。又茶注の內型を作り、型の表面に蟠龍を纖刻して、製器の內部に龍形を現出せしむ。世人之を珍とし、販路日に廣し、有節其の作品に萬古の印を欵せんことを冀ひ、之を五左衞門の孫五郎兵衞に請ふ。五郎兵衞之を諾す。これより皆萬古、萬古不易、有節等の印を押す、之を萬古中興の祖とす。爾來萬古の製品益々世に行はれ、男有節之を繼で今日に及び、漸次其の法を傳へて、三重郡海藏村末永の山中忠右衞門、飯南郡射和村の竹川竹齋は嘉永に起り、海藏村東阿倉川の堀友直は文久元年に、四日市の河村又助は明治八年に、同市の伊藤庄八と桑名の松村淸吉は十二年に、三重郡濱田村の生川善作は十三年に起り、その他爭ふて開窯するもの十數戸に及べり。而して有節は小向村名谷の赤白土、桑名郡播磨の白土を用ひ、その



他は庚申山の白土、小向、株、縄生諸村の赤白土を用ふるなり。

萬古燒今日の盛況を呈し、販路の世に弘まるに至りたるは、河村又助の盡力與つて大に効あり。又助の業を開きたる、明治八年にあれども、當時販路の狹きを慨し、同業者九名を説て、共同販賣の一社を設け、製品にも注意を加へたりしが、共同者中其の束縛を苦にするものあり、間もなく之を解散し、更に模樣、格好の點に力を加へ、横濱、神戸等に出でゝ、外人と取引の道を講じ、鋭意其の販路の擴張に加ふるに至れり。此の間需要者の嗜好に副はざる點を研究改良し、約束日限を延ばす弊を改め、荷造の上に苦心を重ぬる等、幾多の困難と闘ひて、終に能く今日あるに至り、内地一般に賣れ行くと共に、海外に多くの華客を有するに至れり。

近年下野足利郡樺崎村にて、橋本忠平なるもの、有節に學べる陶法に據り、萬古燒を製するに至りたれども、伊勢萬古の如く、土質の緻密精美を見る能はず。

唐津と瀨戸物

瀨戸燒の起原

瓷器の傳習

漢國の陶法を學ばしむること。

尾張

大阪以西の關西人は、陶器を呼んで俗に唐津といひ、名古屋以東の關東人は普通に陶器を瀨戸物ともいふ。肥前の唐津、尾張の瀨戸は、共にその製陶の起原も古く、產出の額も多くして、日常一般の使用に普及したる結果、兩者の地名は爾く陶器の代名詞とはなれるなり。尾張には此の瀨戸物以外、常滑その他の陶窯あり。

瀨戸燒

瀨戸燒は、尾張東春日井郡瀨戸町を中心とし、附近の諸窯より產出する陶器の總稱なり。此の瀨戸燒の起原に就ては、史籍之を審にせず。弘仁六年尾張山田郡(今の東春日井郡)の造瓷器生三家人部乙麿呂等三人瓷器を傳習して業成るを以て、朝廷命じて雜主に任じ、出身を聽し、筥陶司に屬せしむ。降つて延喜五年朝廷每歲尾張國より獻ずる瓷器の額を定めて、大椀五合、中椀五合、小椀數鐸、茶碗二十口、盞五口、中擊子十口、花盤十口、花形鹽坏十口、瓶十口、となす

長治元年尾張國に命じて、猿頭の硯二十口、瓶二十口を進めしことあり。爾來その巧を傳へ、之を專業とすること、なほ支那の磁州饒州に於けるが如し。然れども、瀨戸をして形あり、實ある眞の陶窯たらしめ、連綿今日の盛大を致さしむるに至れる基礎は、人皇八十五代　後堀河天皇貞應二年、此の地の工人加藤四郎左衞門支那宋に入り、製陶術を研究し、五年の後歸朝、遂に此に開窯したるに始まる。四郎左衞門の子孫相嗣で、其の業に從ひ、其の他の工人亦之を傳へて、以て今日に及べり。以下項を分ちて、其の變遷盛衰の跡を溫ぬべし。

一　元祖藤四郎

元祖藤四郎

元祖藤四郎、本名を加藤四郎左衞門といふ。上下を省きて**藤四郎**といふ。春慶は隱退後の法名なり。仁安三月九月山城深草に生る。父は加藤左衞門尉基連といひ、久我大納言に仕へ、五位諸太夫となりしが、後官を辭し、深草に隱退して陶器を作る。然れども、我が國の陶法は未だ幼稚にして、精巧ならざるを以て、四郎左衞門志を起し、後堀河天皇貞應二年、永平寺開山道元禪師に從て入宋し、建安の天目山に就き陶法を學び、五年を經て、安貞元年歸朝し、父を

藤四郎入宋す

瓶子窯

備前に歸省して留陶す。尋で母に山城深草に侍し、始めて陶法を京畿及び近傍諸州、美濃、尾張の知多、愛知二郡に試む。皆意に適せず、終に山田郡(今の東春日井郡)瀬戸村に來り、良土を發見し、此に窯を開き、名けて瓶子窯といふ。

藤四郎入宋に關する諸説

藤四郎の入宋に就ては、諸説一ならず、道元禪師に從て入宋したることは、本文記する所の如し。一説には、將軍實朝茶をよく養ふ、茶壺を燒く事を尋ねらる。尾張の加藤某、之を承りて、其の臣加藤四郎左衞門に命す。四郎左衞門工夫して燒きて奉る。東鑑に建保二年四月榮西宋より歸る、茶一盞を奉り、茶書一卷を添ゆとなり。又賴山陽が陶説の序には、足利氏の時、瀬戸の四郎建釉を擬して成すとなり。三説皆齟齬せり然れども賴氏の説は時代大に違ひて、杜撰たるを免れず、餘の二說異同を決し難きも思ふに本文の記事、其の眞に近からんか。

入宋前の陶業

藤四郎の陶業は、渡宋以前に於て、既に瀬戸の隣村赤津にて行はれしと雖、歸朝後の技術に比して、頗る劣り、釉薬の法未だ全からざりしなり。後世の茶人、此の兩期に於ける作品を區別せんが爲に、歸朝後瓶子窯にて燒きたるものを唐物といひ、赤津にて作れるものを古瀬戸と稱せり。尤も古瀬戸の名稱は二代藤四郎の作品と區別せんが爲に、元祖藤四郎の作品全部の惣名として用ふることもあり。

古瀬戸

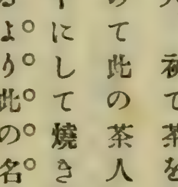
古瀬戸　渡宋前赤津村にて、和土和薬を用ひて、燒きたるものゝ總稱にて、大

形に出來たるを大瀬戸といひ、小形に出來たるを小瀬戸といひ、口兀手、厚手、掘出し手などの名あり。多くは茶入にて

茄子　文琳　尻膨　丸壺　肩衝　大海
芋子　驢蹄口　十王口　花瓶口　柿　瓶子
常陸帶　飯銅　鮟鱇　水滴　手瓶　蔓付
胴高　耳付　鶴首　樽　瓜　餌畚
達摩　文茄

などの名品あり。總じて古瀬戸は、土は白淺黄にて、下藥は柿、上藥は黑、大瀬戸には黃藥もあり。絲切は細かに出來上り、一體に薄作りなれども、中には彼の口兀手の如く厚手のものもあるなり。

●口兀手　渡宋前、赤津の窯にて始めて燒きしものにて、藤四郎茶器の根元と稱せらる。日本陶器は和泉陶器莊にて行基の壺類を燒きたるに始まると雖未だ茶入といふものなし。栂尾の明惠上人、初て茶を弘め世人の之を翫ぶに及んで、元祖藤四郎初めて此の茶人を燒けり。當時藤四郎燒方の鍛錬なく、口を下にして燒きしゆえ、藥は全體に及ばず、口の部分はげたるより此の名あり


口兀手

掘出し手

根拔

相もまた悪しく、手厚にてふつゝかなるものなり。されど、かゝる由緒ある品なる上に、一種の味ふべき所もあるを以て、茶人の珍愛一方ならざるなり。土は淺黄色にて細かく、口造り厚く、捻返し無道にて、その廻りには藥のかゝりなし。下藥は薄墨色を普通とすれど、中には薄柿色、黒み藥赤み藥などもあり。上藥は濃色藥むら／＼と一面にあり、又柿藥に黒なだれのあるもあり。形は圖に示せる如く大振りにて、小體もの稀なり。

●掘出し手　これも又赤津にて燒ける茶入にて、響き、割れ、取り付け、當などの疵あり。これは當時疵ものとして、山谷へ捨て置きしものにて、自然に晒荒て古くなり、土藥見ごとになれるなり。後世谷底より掘出し珍賞す故に此の手の疵はむしろ苦しからず。

●根拔　古瀬戸の大瀬戸ものに、口の付根、藥留りの境に、曳茶の色にて、青みある藥のかすかに置けるものあり。少し淡立つやうに見ゆ。之を梨子目藥又は茶藥といふ、根拔の約束なり。口の捻近し丸くして、玉縁を取りたるやうにて尋常なり。偶には胴に大豆粒ほどに膨れのある茶入もあり、或は根拔と古瀬戸とは異りといふ人あれども、同作なり。たゞ根拔は手厚に作れる差あるのみ。薄手に造りて、細工もよく、土藥もよきを大瀬戸とい

ふ。世に稀なる茶入にて、姿は肩衝、頸は四寸餘、丸壺、尻膨、茄子、瓢簞、内海、手瓶、耳付、類はその主なるものなり。根拔とは古きこと、根の拔けたるといふ義なり。

唐物（からもの）

唐物　宋より歸朝後、瀬戸の瓶子窯にて焼けるものにて、一切の焼物に鞘を作り、底を下にして焼出したるなり、口兀手の如き薬のまばらなる所あらず、薬一體に解けわたり、土も融和して見ごとなり。此の窯にては、宋より持ち歸れる土と薬とを用ひたるより、世人は唐物と稱し、漢土を用ひたるの義をあらはせども、また支那より輸入し來れる陶器を唐物といふことあり、往々にして混ぜらる、注意すべきことなり。この唐物の作品は、土は朱、紫鼠、淺黄などに分るれども、焼けて變色せるもあり。薬は飴黒黄なり。またその白薬なるを蛇蝎といひ、黄薬なるを文琳といふ。逆絲切にて、偶には板をこしもあり。總じて薄手にて、焼け目の輕きが、唐物の特徴なり。

春慶

春慶　宋より携へ歸れる土薬の漸次少くなるに及んで、和漢の土を混ぜ合して作れるものをいふ。これは元祖藤四郎の法號に因みて付けし名なり。土は淺黄紫、下薬は柹、上薬は黄黒、絲切りは輪形、一體に薄作りにて上作なり。唐物よりも一段に出來善く、肩など及の如き姿形をなし、無類のものなり。

その種類は左の如し。

瓢簞　十王口　口瓢簞　飯桶　飛薬　螢

閻　紐付　文琳　懸春慶　蓬萊　擂茶

鶴頭　丸壺　雪柳　色春慶

煎餅手　いづれの窯よりも出る物にて、窯のうちにて火氣強くあたり、上薬かせて、地土ふくれたるものなり。

大名物　**中興名物**　足利より下て、織田、豐臣の世は、茶道益々盛んにして、茶入、茶壺の愛翫一方ならざりき。此の時代に於て、唐物、古瀨戸の價を定められ、小茶碗なほ千圓以上に價したるものあり。この評價に上りたる藤四郎の作品は、之を大名物といひ、世の珍賞措かざる所なり。その數多ければ玆に之を略す。

その後、茶の宗匠小堀遠州、藤四郎以下國燒まで、そのすぐれたるを選びたることあり。之を中興名物と稱し、大名物と共に、大に世に持てはやさる。

古瀨戸の名品　古瀨戸の名は、唐物に對していふ場合と、第二代藤四郎の作品に對していふ場合とあるとは、前に述ぶる所の如し。さて、元祖藤四郎作品のうち、前に列擧したるもの丶外に、名品として知られたるものは左の如し

辰の市

肩衝

平野　耳付　相坂　畠山　可中　在中庵　淺野

釣舟　小肩衝　八重櫻　村雲　雨宿　いよ簾　大鳥

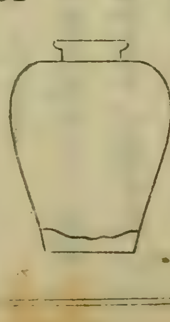
置紋　破被　肩衝　林肩衝　女郎花　もしほ　節季

内海　出雲肩衝　嶽島大海　角木　浪花　霜夜　大海

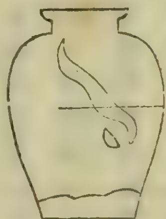
京童　辰の市　釣鐘芋子　鳴海　湯桶　橋　餓鬼腹

太鼓　半切　車軸　神頭

●辰の市　大和辰の市の里より出たる品なり。古瀬戸ものなり。小堀遠州の秘藏にかゝり、遠州自ら其出所に因みて名けしもの。作り薄手にて、土薄赤く石目あり、口造り捻返しよし、絲切かすかなり。下藥柹色に少し黒みあり、上藥は黒藥むら〳〵かゝり、流のやうに見ゆる所あり。下藥上藥共に見え透くやうにて、溜め塗りの漆を見るが如し。



●肩衝　肩の衝きたるやうに出來上れるより名く。形體種々あり、口造り捻返し華奢に、絲切少し荒目なり。腰帶三ヶ一なし。地藥は飴色の艶よく、上藥は黒色飴にて、すこし高く見ゆ。藥留りあつく、藥の色すこし濃く見ゆ。長三寸二分、胴廻



文林　唐の高宗の時李謹といふもの艶美絶色のあかき林檎を帝に奉りけるに叡感斜ならず緑を給はりて文林郎の官に任ず。これより林檎の異名を文林郎といふ。

茄子

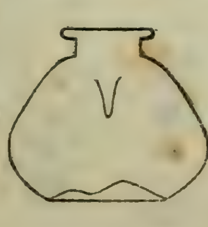
尻膨

り七寸八分、口の徑一寸四分、底一寸六分半なり。

●文林●　林檎の相に似たる故にいふ。唐物の逸品なり。土は淺黄色にて口造り捻返し尋常、絲切細く華奢なり。地藥薄赤色にて艶よく、上に銀梨地あり。上流れは濃黃藥のつやよきものなり。之を文林藥といひ一入賞翫せらる。長二寸四分半、胴廻り六寸八分、口の徑九分半、底九分。



●茄子●　形茄子に似たるより名あり。茄子の形に二種あり、口に甑なく、脊張にして盆透のある形もあり。但し尻膨を茄子と取違ふべからず、尻の丸きは茄子、肩を衝きたるは尻膨と心得べし。昔は眞の盆立の時は、菓子ならでは用ひずとなり。中古宗易以來、略して或は肩衝、文林丸壺、尻膨などを用ふるに至れり。土は紫色にて、口造り捻返しよく、絲切ほそく尋常なり。地藥は黃飴、流れは薄墨色の飴藥、腰廻りは地藥色少く、濃くして高く見ゆ。藥溜り厚く、且つ少し蛇蝎藥あり。長二寸三分弱、胴廻り六寸八分半、口の徑九分、底一寸。



●尻膨●　すその膨れたる形なるが故に此名あり。土は薄赤色、口造り捻返し賤

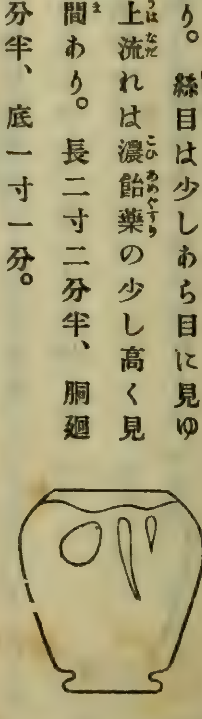
火間（ひま） 茶入を作り藥をかくる時持てる指跡なり。

文茄（ぶんな）

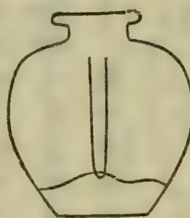
大海（たいかい）

臺子（だいす） 正式の茶湯に用ふる棚、四本

しく、自然に華奢なるもあり。絲目は少しあら目に見ゆ。地藥少し赤色の飴藥なり。上流れは濃飴藥の少し高く見ゆ。地藥の中には指跡の火間あり。長二寸二分半、胴廻り七寸二分、口の徑一寸五分半、底一寸一分。



●**文茄**● 形文林にもあらず、茄子にもあらずとて、秀吉公兩文字を取て、文茄と名付けしとぞ。世に稀なる珍品、唐物中の傑作なり。土は薄白色に少し青みあり。口造り捻返しよし。絲切あら〱とあり、地藥は薄墨色に銀梨地あり。流れは薄色の蛇蝎色、但し流れの先藥色濃く見ゆ。藥溜り黒し。長二寸二分半、胴廻り六寸七分半、口の徑九分、底一寸一分半。一説には、此の形は唐物根拔のよしといふ。



●**大海茶入**● 口の漂々と廣きより、海にたとへていへる名なり。昔大海は茄子の茶入若くは肩衝の茶入に一つ宛添へ置きて茶臼より大海に茶を移して後茄子若くは肩衝へ茶を入れ替へしとなり。されば大海は曳溜の器にして、古より小座敷へ出す法なく、自然廣間書院の臺子にかざり置くなり。



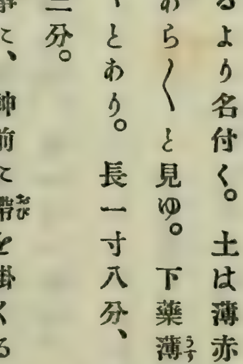


の柱ありて上下に板あり、風爐、茶碗、茶入等を置く。

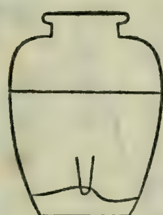
常陸帶　　驢跡

土は淺黄色おこし底なり。口造り捻返し少し無道に、下藥薄柹色、上藥薄墨色、また黄飴藥のなだれあり。長一寸八分半、廻り八寸六分、口一寸九分半、底一寸六分。

内海茶入　大海の小さきものなるより名付く。土は薄赤色、口に甑あり、捻返しよし。絲切あら〳〵と見ゆ。下藥薄墨色、上藥濃薄色の黒ぐすりむら〳〵とあり。長一寸八分、廻り七寸五分、口一寸六分、底一寸三分。

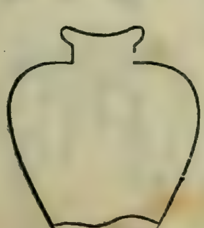


常陸帶　正月十日常陸鹿島の神事に、神前に帶を掛くることあり。此の茶入に帶あるを以て鹿島の神事になぞらへて、常陸帶とはいふなり。世に類多し。帶のうちには小肩衝といふがあり。價極めて高きものなり。



唐物の逸品にして、土は淺黄色、口造り捻返し尋常に、絲切りはそく見ごとなり。下藥は薄墨色、上藥は薄黒、また薄黄藥の流れ一筋細くあるもあり。長二寸五分、廻り五寸四分、口八分半、底八分半。

驢跡　口造りうさぎ馬の跡あとに似たるより此の名あり。



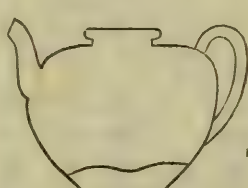
胴高手　水滴　湯桶

土淺黄色、絲切りほそく華奢なり。地藥は薄赤色、上藥は黒色に薄墨色混りて、むら／＼と懸れり。長二寸六分、廻り八寸一分半、口の徑一寸一分半、底一寸二分半の唐物なり。

●胴●高●手　來歷明かならざれど、蓋し茶入の胴に高き所あるが故ならんか。地藥は栗色の沙羅藥の艶よきものなり。上藥は共藥にて色濃く、少し高く流れ、胴筋の所藥なり。但し高びくにて横筋逸に口あり。長三寸七分、廻り九寸二分、口の徑一寸五分、底一寸八分。

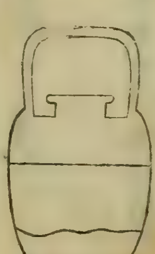


●水●滴●茶●入　此のもの支那にては水器なり。足利義政之を用ひてより、茶入に用ひらる。朱土にて箆おとしあり口造り捻返しよく、圖の如



く、手口あり、又手のみにて無口のものもあり。地藥は黄茶、澁紙手に似たり。手口の廻りに黄藥ちら／＼とあり。此の黄藥を硼砂藥といふ。長二寸一分、廻り七寸二分、口の徑一寸一分半、底一寸三分。

●湯●桶●茶●入　手桶にたとへたる名なり。土淺黄色、口造り捻返し常體の唐物よりは少し手厚に見ゆ。絲切あら／＼



瓢簞

瓜茶入

鮟鱇

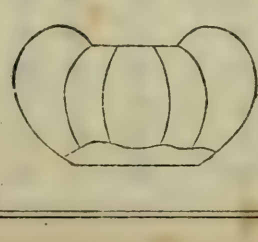
緋口　藥のよく燒けて焦色となり泡立つものをいふ。

とあり。下藥は艶よき濃栗色、上藥は藥溜りと共に蛇蝎色なり。長二寸七分、廻六寸八分半、口の徑一寸四分、底一寸六分。

●瓢簞茶入　形瓢簞に似たるものにて、類少く、頗る珍重せらる。土は淺黄色口造り捻返しなく、絲切ほそく華奢なり地藥薄赤色に少し黒みあり。又梨地のものもあり。上藥は濃黑藥に薄墨の変りて、むら／＼とかゝれり。長二寸二分半、廻り六寸餘、口八分、底圓座一寸二分。



●瓜茶入　瓜の形したる茶入なり。此の口造りを蛇口といふ。土は薄赤色のとも底なり。胴は七葉に葉を切り、地藥は薄墨色、上藥は中黒藥に、上に黄藥をかく。長一寸八分、廻り八寸九分、口八分半、底一寸四分。



●鮟鱇　小堀遠州秘藏隨一の珍品と稱せらるゝものにして、口の廣きこと、鮟鱇の口廣きに似たるより名付く。土は薄赤色、絲切細く華奢なり。胴に六葉の葉あり。下藥は薄墨色に少し赤みあり。上藥は黒飴藥に少し緋口あり。長二寸、廻り五寸六分半、口一寸七分半、底圓座八分。



飯銅　餌籠　太鼓

飯銅茶入　飯銅は唐金の器にて、支那にては食器に用ふることあり、日本にては手水鉢、火鉢などに用ふ。その形に似せて藤四郎の作りしものなり。土は淺黄色にて藥留り少し黒く梨地もあり。上藥は濃黒藥に薄墨色交りなり。長一寸八分、廻り八寸一分、口二寸九分、口の外に筋二線あり、底一寸二分。



餌籠茶入　えふごとは鷹の餌の入物なり。形相似たるより此の名あり。餌籠には鷹匠のゑふご、漁父の餌籠の二色あり。漁父のもつ餌籠は口低く、胴少し圓し。此の圖は鷹匠のゑふごなり。

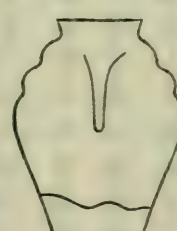


土は淺黄色、口造り捻返しよく、絲切はそく見えてよし。地藥は梨目藥、上藥は黒藥にて、濃色の所流れのやうに見ゆ。長二寸七分强、廻り七寸、口一寸三分、底一寸五分半。

太鼓茶入　太鼓の形にしつらへたるものにて、種類極めて稀なり。太鼓の面には三巴の筋あり、裏表相同じ。胴の廻りに圖の如く鋲あり。土は淺黄色、下藥は薄墨

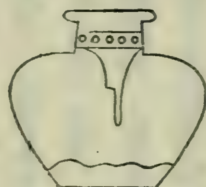


色上薬は濃黒にて、群雲の如く艶よくかゝれり。長二寸四分、口四角にて八分四方、底は揚底にて九分四方。



車軸茶入　車の軸にたとへていへる名なり。肩の付けかた圖に示せるが如し。土は淺黄色、絲切普通なり。地薬は薄墨色、上薬は濃黒色なり。また薄墨色の流れもあり。長二寸五分、廻り六寸一分半、口は請口といひ八分半、底九分半。

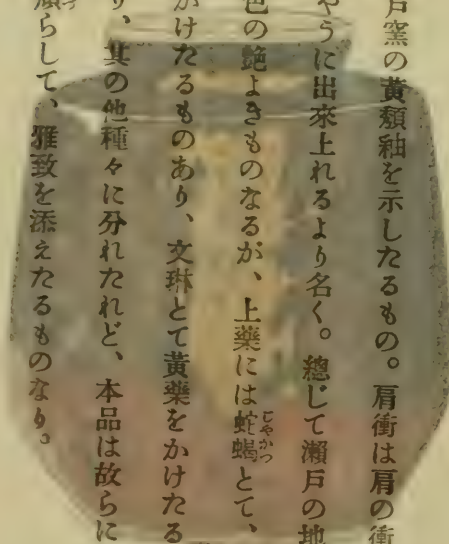
磂茶　一に榴茶に作る。支那にては煮茶の茶をすりて用ふるものを磂茶といひ、その擂木を榴木といふ。頭の廻りに鋲ありて、まるきものなり。此の茶入はその擂木に似たるより此の名あり。土は薄赤色なれども、白に砂少し交れる如し。口造り立延び、廻りに座あり。座の薬は白し。絲切あらく〳〵しく、胴には或は山形、或は筋を切る。この品は古瀬戸泰慶の逸物なり。



二　二代　藤四郎

瀬戸燒二代目より四代目まで、皆藤四郎と稱して良工とす。而して、世人の

肩衝茶壺



瀬戸窯の黄頽釉を示したるもの。肩衝は肩の衝きたるやうに出來上れるより名く。總じて瀬戸の地藥は飴色の艶よきものなるが、上藥には蛇蝎(じやかつ)とて、白藥をかけたるものあり、文琳とて黄藥をかけたるものあり、其の他種々に分れたれど、本品は故らに黄釉を頽(くづ)らして、雅致を添えたるものなり。

車軸

𦉪茶(るさ)

二代藤四郎

色上薬は濃黒にて、群雲の如く鮮よくかゝれり。長二寸四分、口四角にて八分四方、底は揚底にて九分四方。

●車軸茶入　車の軸にたとへていへる名なり。肩の付けかた圖に示せるが如し。



薬は薄墨色、上薬は濃黒色なり。また薄墨色の流れもあり。長二寸五分、廻り六寸一分半、口は請口といひ[illegible]黄色、絲切普通なり。[illegible]分半、底九分半。

●𦉪茶　一に擂茶に作る。文によりては煮茶の茶をすりて用ふるものを𦉪茶とい[illegible]白薬廻りに鍍ありて、まるき[illegible]似たるより此の名あり。土は薄赤色なれども、白く少しく変れる如し。口造り立延[illegible]び、廻りに座あり。座の薬は白し。絲切わらく／＼しく、胴には或は山形、或は筋を切る。この品は古瀬戸春慶の遺物なり。

二　二代　藤四郎

瀬戸焼二代目より四代目まで、皆藤四郎と稱して良工とす。而して、世人の





黄瀬戸

伯菴

眞中古

單に藤四郎と呼ぶものは、二代藤四郎の製品に限れり。初代の製品は、之を古瀬戸と呼び、三代、四代は、之を何代藤四郎と唱ふ。また以て混ずべからず。

二代藤四郎の作品は、元祖藤四郎のそれに比し、一段の進歩あり。三代藤四郎の製品は、また二代のそれに比して、較々勝れり。斯の如く、瀬戸の陶器は漸次進歩の域に達せり。二代藤四郎は、從來の瀬戸物が、概して茶褐色の釉のみを施せるを改めて、黄色釉を施すことを發明せり。因て藤四郎の製作に係る茶壺、香爐、花瓶、茶碗類を黄瀬戸と稱す。是より今日に至るまで、瀬戸燒は多く黄釉のものなり。

黄瀬戸　黄瀬戸の茶碗に伯菴と稱するものあり。寛永年間幕府の醫員、曾谷伯菴の珍藏せしより、時の人之を賞揚して伯菴といふ。而して、その類似品も亦伯菴と名づけ、たゞに茶碗のみに限らず、同時の作を總稱して、伯菴といふこともあり。伯菴の藏品は華族稻葉氏に傳はり、稻葉氏累世之を藏せしが、今は商人某の手に在りといふ。

眞中古　藤四郎の作をまた眞中古といふ。蓋し元祖藤四郎の古瀬戸に對していへるなり。一體に上作にて、元祖藤四郎の古瀬戸に似たるものあり。三代藤四郎の中古ものに似たるあり。土は鼠、淺黄、白、薄赤などの數種に分れ、藥

は柿黒を普通とし、中には黄もあり、青もあり、輪絲切と本絲切との二色あり眞中古の名高きものは左の如し。

橋姫　小筵　朝霜　玉川　小島　思川　野田
月迫　大瓶　小川　面取　不面取　初風　猿若
宮城野　大覺寺　常夏　三國　蠟燭手　底面　穀
鈴鹿山　寢亂髮　蛙聲　面影　比丘貞　泡沫　正木
大正木　佐久間　染色　吸江　轉合庵　糸目藤四郎
柳藤四郎　花藤四郎

藤四郎春慶

藤四郎春慶　元祖藤四郎の春慶に對して、藤四郎春慶といふがあり。土は鼠白紫淺黄種々あり。薬も絲切も元祖春慶に同じけれども、地薬さら／＼と見えむしろ上品の方なり。品物には、

貯月　瓢簞　塞　紀伊海　不二無香　初雁　柴山
〆切　常如院

など名高し。

藤四郎の名品

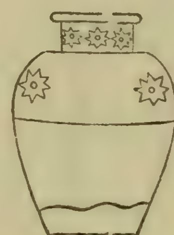
藤四郎の名品　以上列擧せるものは、二代藤四郎作の尤物なるが、此等の中より、また其の他のものより數種を擧げて、之を圖に示し説明せん。

●●伯庵　利休の弟子伯庵、利休に茶碗を所望せしに、面白きものなく、漸くにして黄瀬戸一つを取出して與へたり。伯庵之を秘藏して、生涯これをのみ貴びたり。依て之を伯庵といふ。なまこ藥にて、藥の内に萠黄やうの藥かゝれり。藥溜りなまこ藥紫のやうにて、黒きかた萠黄もあり。

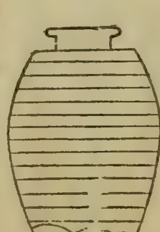


伯庵

●●●●花藤四郎　口のまはりに菊の置紋、または梅鉢、笹の葉のやうのものを紋に据ゆるを以て此の名あり。土は淺黄色にて、口造り捻返し良く、絲切細く、極めて華奢に出來上り、地藥は濃柿色、上藥は黒飴の藥に、黄色飴まじりて、むら雲のごとくかゝれり。

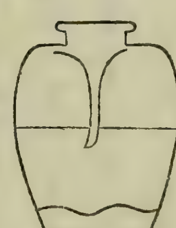

花藤四郎

●●●●●糸目藤四郎　相はふり〳〵形多く、薄手にして、細工格好よく、茶入の胴に絲目あり。上々の作にて極めて稀に見る。土は薄淺黄色、口造り捻返し華奢に、丸絲切轆轤目あり。時としては常體の絲切もあり。下藥は柿色多く、又濁きたる栗色藥もあり。上藥には黒藥むら〳〵と黒雲の如く、むらだちてかゝれり。或は地藥薄赤に、上には薄黒藥の刷毛目あるもあり

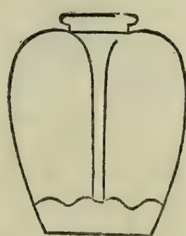

糸目藤四郎

橋姫手　野田手　蠟燭手　夏山

●●●橋姫手　「狭筵に衣かたしく今宵もや我を待つらんうぢの椿姫」の心を以て、遠州公の名づけし逸品にて土は土器色、口造り捻返し華奢に、糸切見ごとなり。下薬は柿色の滑かなる薬立なり。上薬は黒薬に黄薬所々にまじりて、一面にかゝれり。土薬細工まで、萬事によきものなり。



●●●野田手　奈良の野田彌兵衛の所持せしを、小松黄門召上げられて後、遠州公野田の名字を以て、名とせしものなり。土は赤色に少し黒みを帯びて柔かく、口造り捻返し見ごとなり。糸切わら〳〵と見へて華奢なり。薬留は厚くして黒薬なり。下薬濃柿色にして少し黒みあり。上薬茶入の肩を取廻し、濃黒薬の流れあり。此の手の茶入、いづれも景よし。



●●●蠟燭手　形體の蠟燭に似たるより此の名あり。土は淺黄色、口造り捻返し賤し。糸切見ごとなり。下薬薄赤色薄黒色などあり。上薬は濃黒にて光澤よし。

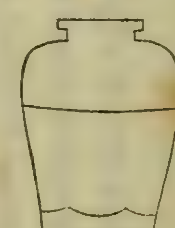


●●夏山　あまたの中に、此の茶入すぐれて見ゆ、といふことにて、遠州公「夏山の青葉まじりの遅櫻はつ花よりもめづらしきかな」の心

面取手

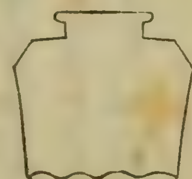
面不取手

を取りて名けしものなりとぞ。土は淺黄色にて、少し白色あり。また薄赤色もあり。古きものゆえ、赤黒く



見え、轆轤目尋常に見ゆ。口造り華奢にて、捻返しに肉少しあり。口のうちに面を取る。下藥は栗色又は濃薄色、また栗色に銀梨地の一面にかゝれるもあり。上藥は黒飴藥の飛藥、胴の廻りに指跡大に所々にかゝれり。

●面取手　圖の如く、肩と底とに面を取りたるものにて、世に類多く、下直なり。土淺黄色、また赤色もあり。少しあら目に見ゆれども、元來漉し土にて、細かなるものなり。口造り捻返し厚く、賤しき造りやうにて無道なり。絲切明かに見えず。下藥は薄柿色、また薄黒藥、或は地柿の照りたる藥もあり。上藥は黒藥むら／＼と一面にかゝれり



●面不取手　面取手の面を取りたるものなり。面取手と同作なれども、薄手に仕上り



細工よく、格好見ごとなり。代價も至て高し。土色、絲切共に面取に同じく、口造り捻返しは、殊の外尋常にてよし下藥は薄柿色なり。上藥はむ

蟲喰藤四郎

三代藤四郎

金華山　陸前松島の東に位し、全山黄金をつらねたるが如く、海底の産物、金海鼠は金砂を含みて其腸

ら／＼と濃き薄にかはりてかゝり、その中に、濃色の所流れのやうに見ゆまた上薬に黄薬のかゝれるもあり。

蟲喰藤四郎　土薬を蟲のくひたる跡より名付けしものにて、薄赤色又は薄淺黄色の土にて作り、土の中、底の内までも蟲くひの跡あり。口造り捻返しよく、糸切は細く幽かに見ゆ。下薬は柿色の少し黒みあるもの、上薬は細き流れ幾筋も圖の如く少し高く見え、入違ひにかゝれり。但し流れの色は、黒色、黄色、飴色より成り、一筋のうちにいろ／＼に變り、花やかなる薬組なり。



三　三代藤四郎

永仁年間第三代藤四郎の開きたる窯を金花山といふ。又二代藤四郎の窯を異中古といふに對して、中古物ともいふ。金花山は美濃金花山の土を取りて、製したるよりの名なりともいひ、また三代の作品は、金色澤山なるより、陸前松島の東、金華山の一山さながら黄金をつらねたる如きに因みて名けたりともいふ。

皆金色なり、草木までも只ならず古歌に、すめらぎの御代の榮えむとあづまなるみちのく山にこがれ花咲とある所なり

金花山の名品

飛鳥川

三代藤四郎は又兎四郎といふ。二代藤四郎の男なり。その作品は二代のそれよりも勝れて上品なり。元祖藤四郎の法に倣ひて、茶褐色の釉を施し、その上に斑に黑色釉を施したるものなり。茶入、茶壺を多く作り、雜品は少し。金花山に限りて、黄色釉はなく、唯僅に藤波と稱する茶壺のみ、黄釉を加へたるに過ぎず。絲切は輪糸切と、本糸切との二色あり。茶壺は古瀬戸の風を模し、一際上作なれども、雅致は古瀬戸に及ばず。

●金花山の名器　金花山には亦名器多く、名物記に載する所のものなり。その主なるものを擧れば左の如し。

飛鳥川	疵肩衝	雲井	木枯	三笠山	鷹羽屋	春日山
花櫻	玉柏	常盤	增鏡	村雨	二見	即色
大津	白露	打出	瀧浪	白浪	志賀	丸肩衝
木本	三輪山	藤波	廣澤	春雨	藤重	眞如堂
神樂岡	龍田	響灘	鏡川			
瀬戸天目	谷陰	青江手	松島	妹背山	盤余野	呉竹
白浪						

●飛鳥川　小堀遠州公わかき頃、泉州堺にて初めて見し時は、茶入も若かりし

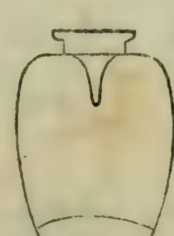
滑飛鳥川

玉柏

がその後伏見にて同じ茶入の目に觸れしは、半ば過ぎ行くばかり古くなれりしことは、誠になかれて早き月日なりけるとて、古歌を引て飛鳥川と名づけ、秘藏せりと云ふ品なり。

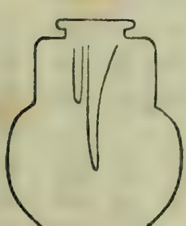
明日といひけふもくらして飛鳥川　流れも早き月日なりける

土は薄赤毛にて、土器を見るやうに和かなり。但し根元のあすか川の土色は白し。口造り捻返し薄手にて、



第一姿を華奢に作れり。糸切一際尋常なり。地藥は濃柿藥色に梨地一面にあり。上藥は濃墨の如き黒藥肩を取卷く、之を肩黒手といふ。珍品なり。或は地藥は薄柿色に、上藥は黒藥むら〳〵とかゝりたる茶入あり、これも無類の珍品なり。又滑飛鳥川とて、土堅く、柿藥の艶つよく、細工のはるかに劣れるものあり。

●玉柏●　難波津のもに埋るゝ玉柏顯れてより人の戀めや、といふ古歌に因みて、小堀遠州公の名づけしものにて



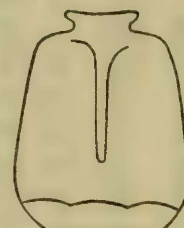
秘藏第一の名品とせられき。形は胴にて少しくしまり、上下なれあひ、格好よし。之を玉柏體といふ。土は薄赤色に

青江手

廣澤手

少し緋色あり。口造り捻返し一際華奢なり。糸切はそく尋常にて一入見ごとなり。下薬は柿色の艶よき薬組にて梨地あり。上薬は黒薬、濃薄きいろありて、一面にかゝり、黒薬の濃き所、なだれのやうに見ゆ。

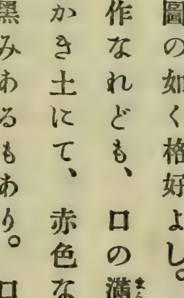
●青江手　遠州の臣勝田氏、此の茶入を求めて、主公へ献じけるに、遠州の喜び一方ならず、名を瀧波と呼べり。その後青江の脇差を拝領したるより、世俗青江手と稱せり。茶入の姿は圖の如く裔にて少し張り、胴にてしまれり。これ青江手の約束なり。自然になれあひたる姿を好む。土は薄赤色にて、偶には緋底の堅き土もあり。口造り捻返しは丸く、玉縁を見る如くにてよし。絲切常の通り、又削りたる如くにて、小刀目の跡あるやうの底もあり。下薬濃柿色にて、所々銀梨地色あり。上薬は濃黒薬の流れなり。或は薄柿の黒みある薬に、上に黒薬むら／＼とかゝれるもあり。又下薬梨目薬に、上薬にも同薬の濃色にて少し高く、薬溜りのやうに見ゆるなだれのある茶入もあり。又下薬柿色に上薬には、黄薬のあるもあり。



●廣澤手　松平備州侯の所持品なりしを、小堀遠州之を見て、斯ほどの茶入今まで見る人もなしといふ心を以て、古歌の

廣澤の池の面に身をなして見る人もなき秋の夜の月

といふを引て、名付けられたるものといふ。姿は口少しく延びて、肩を衝き、裾張にて盆透あり、圖の如く格好よし。此の體を廣澤體といひ、無類の上作なれども、口の滿足なるは稀なり。土は土器色の柔かき土にて、赤色なり。又能く焼けて、堅き土の少し黒みあるもあり。口造り捻返し一入見ごとなり。糸切は細く華奢なるものあり、見えぬもあり。



沙羅薬

下薬は濃柹色に梨地ありて、薬に小砂の変りたるやうに見ゆ。これを沙羅薬といひ、廣澤の約束の薬なり。上薬は流れ黒く、濃墨の光れるが如し。或は下薬薄赤色の黒みあるに、上薬には黒薬むら〳〵とかゝる茶入もあり。

四　四代　藤四郎

破風窯

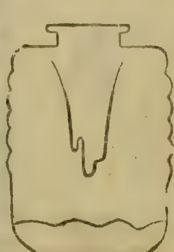
建武年間四代藤四郎の製造せし窯を**破風窯**といふ。其の釉法他と異り、器の外面高臺に至るの際、釉色自から不足して、山の狀に地質を露はし、其の形破風に似たるより名けしものなり。而して其の釉を用ふるには、先づ茶褐色の釉を施し、その上に黄釉を施せるものにて、作品は茶壺最も多く雜品少し。世

に滋紙手と稱するものは、此の窯より出せるものなり。一體に上作にて、本絲切、輪絲切の二色あり。

●破風窯の名器　その種類多く、主なるものは左の如し。

口廣天筒山	口廣紹高	忘水	皆の河	玉水	宮島
口廣鶺飛彈	音羽山	兒手柏	潮路庵	筧	翁
中古肩衝	玉津島	山櫻	濡立	玉川	凡
戸難瀬	卯の花	小島	正木	擢屑	米市
大正木	かきね	布引	蓬生	市場	口廣
捻貫	女郎花	腰簑	玉霞	月草	垣根
擂粉木	胴〳〵				

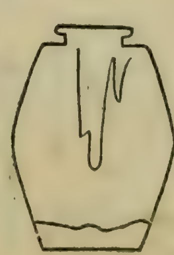
●捻貫　形の捻子貫に似たより名づく。土は赤色に緋色あり、底多し、口造り捻返しふつゝかなるが多く華奢なるは稀なり。糸切大抵は見ごとなり。下藥は濃柿色にて銀つよく、上藥は黑藥むら〳〵とあり。また黃流れ、黑流れもあり、或說には、此器の地藥薄柿又は中柿に、點藥の流れ又は黃藥の流れあり、口造り捻返し胴に捻貫筋あり。肩先盃付にて、細面取な



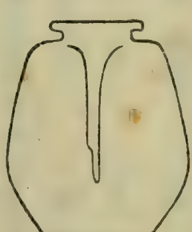
漉紙手　凡手　市場手

りとあり。

漉紙手　藥立を見立てゝ、俗にいふ名稱にて、茶入に限らず、水指その他の雜器にもこれあり。茶入は世に稀なるものにて、土は薄赤色、又は赤色に黒みあり、土の面石目の如くなり口造り捻返しよく、姿はぶり〱にて薄手に造り、細工よく、絲切もよし。下藥は薄赤色に少し黒みあり。また茶藥のやうに見ゆる藥立にて、荒々とかゝれる藥に、上に共藥少し厚く流れあり。或は下藥は飴色の沙羅藥に、上流れは薄黄藥色なり。



凡手　茶入の持主秘藏淺からず、凡そ世に無類たるべきものは、と自慢の心深く、之に由りて詞の縁を用ひて、則ち凡手と名付けたるなりといふ。土は赤色の細かなるものにて、口造り捻返しは華奢なり。絲切は細くして美しく、地藥は栗色の金氣藥の見ごとなる藥組なり。上藥は濃黄藥の流れあり。他に類を見ざる藥組にてその名に背かず。形振は利休織部に似たれども時代を見れば凡中興。



市場手　或人の北國市町にて求め出したるより、遠州公の名付けしものとぞ

破風手

祖母懐　今の瀬戸町の一字なり



土細かなる薄白色にて見ごとなり。口造り捻返しは華奢に、糸切一際見ごとなり。下薬は濃柿色、薄赤色、薄黒色、銀梨地など種々あり。上薬には濃薄き色の黒薬かゝり、濃色の所流のやうに見ゆ。此の茶入の手曲として必ず箆目あり、細工よく、薄手にて形格好頗る見ごとなり。また瀧流れ、ふり〳〵形の姿などあり。

●●●破風手　此の茶入の手曲は、破風窯の特徴を現はしたるものにて、薬留りの所、圖の如く破風形を爲すを常とす。土は白色に少し青みのもの、口造り捻返しは厚みに見え、糸切華奢なり。地薬は茶色に少し黒みあるものと、赤みざしたるものとあり。上流れは共色薬に少し濃薄く流る。又自然に青薬のかゝれるものもあり。



五　祖母懐　御深井焼

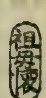
祖母懐は、尾張東春日井郡のうばがふところといふ地名なり。元祖藤四郎宋より歸朝後、此所の土を以て製せし茶入の名なり。壺肩衝、丸壺等あり。底に

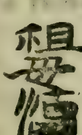
祖母懐と書付けたるもあり。壺に祖母懐と刻みたるもあり。何れも古瀬戸の類なり。圖に示せるは、古瀬戸祖母懐の一種にして、土は淺黄色、又薄赤色の茶入もあり。口造り捻返し恰好よく、丸糸切幽かに見えて華奢なり。下藥は大方かせたる栗色黒みある藥多し。上藥は黒飴色の飛藥なり。或は黒藥、黄藥のむら〳〵とかゝれるもあり、概して刷毛目分明に見ゆ。



爾後相次で、元祖藤四郎の法に倣ひて、其の地の工人之を製作したれども、品位劣れり。然れども點茶家その質朴なるを賞して、今なほ珍賞す。

正保年間、尾張の藩主徳川光友、時の工人加藤仁兵衛、同太兵衛、同唐三郎の三人に命じて、城中に窯を築き、祖母懐の土を以て、各種の茶器を作らしむ其等の器物は、質滑かにして、上好土色鼠色を帯び、唐物茶入に酷似し或は赤色に灰色を含みたるもあり、釉は灰色の透明に緑色を帯びたる水釉を施せるもの多く、或は他の釉を用ひたるもあり。頗る精巧にして、世の賞讃する所となれり。製作品には皆祖母懐の印を附せり。





城中に於ける祖母懐の窯は、その後間もなく中廢に歸せしが、文化年間藩主

後窯

の命により、之を再興して、各種の陶器を製出せり。次で天保年間國主齋莊公工業の奬勵として、時の工人に命じて、茶壺を始め、各種の陶器を作らしめ、稱して御深井燒といふ。正保年間のものよりは、一段優良にして、元贇燒に似たる所あり。御深井燒の印を刻す。

六 後窯

後窯とは、五代藤四郎以後、十三代新右衛門時代までの間に、瀬戸系各種の工人によりて作られたる窯を總稱していへるものにて、之を大別すれば、坊主手、宗伯、正意、山道、茶臼屋、源十郎、姉、利休、鳴海、織部、捻貫、八ッ橋、伊勢手、萬右衛門の諸燒となる。概括していへば、土は淺黄、白、赤みある鼠色、上藥は色々に分れ、下藥は各柿、石はせ、梨子目等その作々によりて異り、丸糸切、本糸切。一體破風に似て、箆目ある品多く、下作にして、織部利休、正意などは、さびたる形多く、萬右衛門、宗伯は國燒に類し、姉は飛鳥川、眞如堂を學べり。土藥はいづれも新しく見ゆ。

後窯の作品にして名高きものは、大概左の如きものなり。

落穗　振鼓　田面　鳥羽田　初祖　二祖

岡邊　面壁　芦葉　尾花　環　下露
有明　辯舌　山雀　空也　侘助　雨川
澪標　地藏　餓鬼腹

瀬戸五代後十三代迄の傳統

瀬戸の第五代を藤四郎信政といふ。四代の男なり。父の業を繼ぐ。

六代を藤四郎基治といふ。信政の長子なり。

七代を藤十郎政長といふ。基治の男、父の業を繼ぎ、後藤四郎と改む。

八代を八十左衛門基時といふ。政長の男にして、父の後を襲ひ、後藤四郎と改む。

九代を仁三郎政高といふ。基時の長嗣なり。後藤四郎と改む。

十代を十左衛門基村といふ。基時の二男にして、兄政高の後を繼て、陶業を事とす。

十一代を藤兵衛基長といふ。基村の長子なり。

十二代を萬右衛門基範といふ。基長の男なり。天文年間父の業を承け、父に劣らざる名工となり、世に賞讃せらる。永祿六年十二月織田信長より瀬戸窯に制札を受領し、後美濃の水上及び大平に開窯し業を營む。信長より得たる

制札左の如し。

○制　札

一瀬戸物及諸事郷商人國中往返不可有違亂事

一當郷出合の白俵並に鹽アイ物以下出入不可有違亂當日横道高馬停止の事

一新儀諸役郷貫不可之事

右之條々違犯之輩有之者速に可加成敗もの也仍下知如件

永祿六年十二月　　信長㊞

又陶器業者へ左記の證文授與せられたり。

證　文

一瀬戸燒物釜の事如先規彼於在所可燒之爲他所一切釜不可相立者也

天正二年正月十一日　　信長朱印

第十三代を新右衞門景重といふ。基範の長子なり。弟の三子右衞門と共に、隣村赤津村に移り、陶器を業とす。慶長中徳川家康より江戸に歸るべき沙汰あり。特旨を以て、兩人へは瀬戸、赤津、品野の三村隨意開窯在住を許され、宅地、職場地等除地せられ、又諸租免せらるゝの證を享く。依りて景重は瀬戸に移り、次男景光は品野村に移りて、各々陶業に從事せり。

當時此の兄弟は、共に名工と稱せられ、景重は徳川公の命によりて、茶壺を

坊主手

宗伯

正意

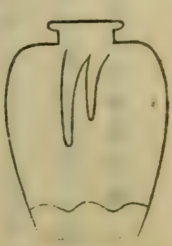
製し、御用窯と稱せり。世俗に慶長藤四郎献上の茶壺と呼ぶは、即ち此の新右衞門の作なり。

●坊主手　後窯と稱するものゝ中には、必ずしも瀬戸窯に限らず、瀬戸に同じ燒やうのものを一括して、後世之を稱したるものゝ如し。此の坊主手の如き、正意、宗伯、源十郎、萬右衞門の如き、いづれも京住のものにて、陶器を好み、茶入を製したる利休時代の人なり。坊主手は或は京都御堂坊主の作なりともいひ、或は捻返しなくて、坊主頭のやうなるより名づくともいひ、諸説一定せざれども、古瀬戸にまぎるゝ作なるより、後窯の部に編入せるなり。品は上作にあらずと雖、類少きより珍とせらる。

坊主手の茶入は、捻返しなく、口造りいやしく、土は薄赤色にて堅く見え、小砂交れり。地藥は薄赤色多く、偶には薄黒色もあり。上藥は黒藥に黄飴藥交りかゝり、中には黒流れ、黄流れなどのあるもあり。

總じて手厚に出來たり。

●宗伯　利休時代の京住茶人の作者とのみありて、諸書其の詳細を傳へず。窯印は○を用ふ。



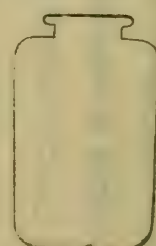
●正意　初め泉州堺に在りしが、後京都に上り、室町四條下ル所に住して、眼科

山道

遠山手

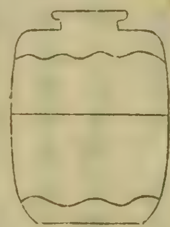
茶臼屋燒

醫を業とし、又瀨戶へ下りて茶入を燒きしといふ。岡邊、二祖の名品は、此の人の作品なり。土は薄赤色にて、口造

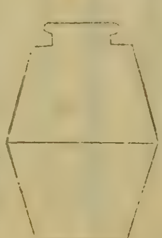


り絲切り共によく、地藥は黑き禾目に黑き蛇蝎藥などありて、流れは一體に細き方なり。

●山道 作者を詳にせざれど、此の作の手曲として、圖の如く山道を深く切れるより、此の名出でしなり。尤も中には山道のなき茶入もあり。土は淺黃色にて細かく、また薄赤色のものもあり。口造りはよく、捻返しは殊に見ごとなり。絲切亦よし。下藥は薄赤色に少し黑みあり。又濃柿藥もあり。上藥は濃黑藥むら〳〵とありて、藥縮頗る見ごとなり。少し品は下れども、これと同作に●遠●山●手といふがあり。茶入引かけにて遠山を作るより、此の銘あり。



●茶●臼●屋●燒 京都押小路下ル、本能寺前のものなり。始め泉州堺に住し、京都に來りては、五條に住したることありき。大瓶手を多く燒きしといへど、此の作品は名器といふ部に入らず。地藥は濃飴又は黑き禾目、土はいかにも堅く、又柔かなるもあり。利休時代の燒手なり。



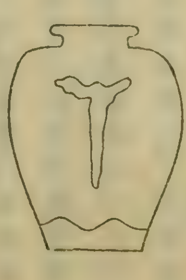
源十郎　姉手　後家手　利休燒　鳴海手　織部燒　八ッ橋

源十郎　利休時代京住茶入の燒手なり。されど上作のものにあらざるを以て、世に多く用ひられず。

姉手　藤四郎の寡婦なりしより、此の人の燒きしものを、姉手又は後家手といふ。藤四郎の作品によく似、見るところ少し變りあり。世に用ひらる。

利休燒　利休自ら物數寄に燒きしものといふ。土は薄赤色、絲切よく、おこし底多く、口造り捻返しは賤しく、藥組は種々に分れ、格好は高き肩衝多く、箆目は必ずあり。名品に地藏といふ茶入あり。世の賞讚する所なり。

鳴海手　古田織部重勝が、尾州鳴海に窯を立て、茶入六十六個を燒き、之を諸國にひろめ、所の名を取りて鳴海手と稱す。土は薄淺黄にて、薄手に作り、頗る見ごとにて、世に類少く、高直なり。土は薄赤色の細かなるものにて、口造り捻返し清く、糸切よし。下藥は薄赤色の梨目藥、上藥は濃黄流れなり。



織部燒　古田織部が物數寄に燒きたるものにて、澪標などの名品あり。別に項を起して之を說明しあれば、就て見らるべし。

八ッ橋　上藥の景八ッ橋に似たるより此の名あり。藥は瀬戸藥にて、前に杜若

伊勢手

萬右衞門

落穗と田面

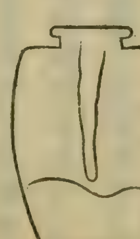
の模樣掘り込みあり。黃藥はなし。若しあらば甚だよきものなり。

伊勢手　俗に春慶といへるものなれども、所謂伊勢春慶とは異り。伊勢尾張の境にて燒きしものなり。

萬右衞門燒　京都柳の馬場、三條下ル町にて燒きしものにて、唐物を似せて造りしものなり。世に種類多く、さまで名品といふものにてはなし。土藥、糸切、細工ともによろしからず。落穗、鳥羽田、振皷、田面などの名高きものはあれど、栗田口その他にて造りし贋物多く、眞贋の區別立ち難きものなり

落穗と田面　兩品の來歷につき、陶說要錄に面白き記事あり。淀の城主永井信州公の家來に、佐川田喜六昌俊といふがあり。好みて茶の道を嗜みけるに、何れともなき茶入を求め得たり。何とやらんしほらしく覺えければ、或時遠州公を招請して見せければ、是は萬右衞門の作なりと申されけり。さて〳〵左樣とは存せず、麁末にいたしたりとて、大に喜びけり。銘をつけて給はれとたのみければ、遠州此の茶入はひろひ物なれば落穗と名付給ふべしといはれし故、佐川田悅び、以後落穗とぞいひける。其の時の老中堀田相州聞及ばれ、喜六へ所望致されたり。佐川田やむことを得ず、相州へ參らせたり。ひろひものなりとて、落穗と名付しを貰はれ

しも、是非なし。此の時天王寺屋慶子私所有の茶入、是に似たるやう申ければ、取よせ見せられよとありし故、慶子即ちとりよせ、遠州公に見せければ、是れ同様萬右衛門の作なり隨分大切にいたされよとありければ、慶子何とか銘を願ひければ、田面と名付け給ふ云々。



落穂は口造り捻返し見ごとに絲切は尋常、土は薄白色にて、少し青味あり下藥は薄墨色、上藥は黒藥むら〱とかゝれり。

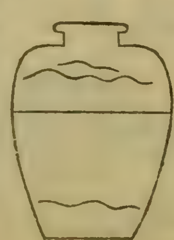
七　春慶各種

元祖藤四部、晩年春慶と改め、巧思を出して一種の陶器を製出し、名けて春慶といふ。これ元祖藤四郎の條にて説明せし所。質茶褐色にして飛點の黄釉を施せるより、一に飛春慶といふ。上作にて、支那の茶壺に髣髴たり。二代藤四郎亦春慶を作れること、その條にて述べたるが如し。その製法元祖のそれに劣らざれど、唯茶入のみを作りて、他の品に及ばず。その後正信、信慶、堺春慶吉野春慶、伊勢春慶などあり、何れも春慶の陶法に倣ひて、各地にて作りしものなり。既にして此の諸窯みな廢る。

朝日春慶

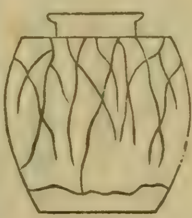
雪下春慶

朝日春慶　元祖藤四郎或年美濃の朝日にて燒弘めたるものともいひ、或は本朝日域にかたどり、しのゝめに朝日のかゞやけるやうに藥の色合を取れるよりいへる名ともいふ。これ見所の大事、功者の秘密なりとぞ。土藥、形格好、細工ともによく、薄手にて萬事見ごとなり。類極めて少く高價のものなり。



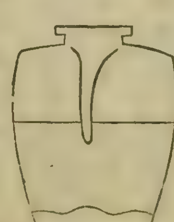
土は元來淺黃色なれども、古きゆえに薄赤く見ゆ。口造り捻返し華奢に、丸糸切尋常に、下藥は薄柹に梨地一面にあり、或は栗色の藥立もあり。上藥は黑藥に薄黃飴藥かすかに掛れる飛藥なり。但し飛藥の數少きを賞翫す。

雪下春慶　小堀遠州の臣村瀨氏所持の茶入にて、柳の枝に雪の降りつもりたるに似たればとて、遠州古歌を引て名付けしものとぞ。相は圖に示せる如く、薄手ものにて細工よく、上藥もよく上々のものなり。土は濃鼠色にてまた赤色もあり。絲目の如き轆轤の引目あり。口造りよく捻返しの鋒薄く見ゆ。下藥は濃飴にて艶つよく、上藥は幾筋も入違ひて流れあり。藥の色は飴色の赤みある所へ、黃藥交りかゝり、流れ藥のうつろひ白く見えて、柳枝に雪の降りか



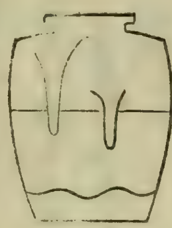
かりたる如く見ゆ。

●堺春慶　利休時代に泉州堺にて焼きたるものといふ説あれど、證なし。美濃尾張の境にて焼きたるより名づく、とする説眞なるが如し。土は薄淺黄色にて口造り捻返し薄手にて尋常、丸糸切の轆轤目華奢に、腰帯あり。流れは濃き金氣薬少し高く見えて、必ず流る。大方は一色にて、景のあるもの稀なり。地薬は薄栗色、上薬は金氣薬なり。細工よく、形すがた見ごとなり。



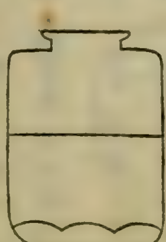
堺春慶

●金氣春慶　土は薄淺黄色少し荒々と見え、口造り捻返し見ごとに、糸切よく、腰帯あり。地薬濃栗色少し黒みあり。但し上の金氣は銀のさび色を見るやうにて、自然なだれあるは、共薬色濃くして、すこし高く見ゆ。總じて形恰好、細工よく見ごとの作なり。



金氣春慶

●却含手春慶　見るたび毎に心のはづむといふ意より付けし名なり。土は黄色、口造り捻返し尋常にてよく、糸切華奢にて見ごとに、下薬は薄柿色に銀梨地、上薬は薄墨色に黄飴薬少し交り、流れあるものなり。又所々に飛薬あ



却含手春慶

伊勢手春慶

瀬戸春慶

り。

●伊勢手春慶　春慶作りにはあらざれど、能く似たるよりいふ。土は白色の堅きものにて、口造り捻返しよく、丸糸切なり。下藥は濃柿色の銀つよく、上藥は黒色に黄飴色まじりて、飛藥多し。自然一筋流れの茶入あり。これは千種とて賞翫せらるゝものなり。また地藥黒に黄飴の飛藥あるは下作ものなり。



●瀬戸春慶　瀬戸窯にて燒ける春慶なり。朝日手の作者以後の燒物なり。春慶の手曲はたしかにあり。土薄赤色にて、少し石目あるやうに見ゆ。口造り捻返し薄手にあらず。糸切は見ごとに、下藥柿色に少し黒みあり。上藥黒色にて所々に黄藥のまじれる飛藥なり。

八　國燒

瀬戸以外、諸國に於て燒きたる陶器にして、瀬戸に倣ひたるものを俗に國燒といひ、遠州の名物記に載せたるもの多し。普通國燒と稱するものは、薩摩、高取、肥後、丹波、膳所、備前、伊賀、信樂、御室、唐津、尹部、宇治田原、朝日などなり。

その土も藥も國々によりて種々あり、絲切も順、逆、九の種々に分るれど、概していへば、一體に下作なり。中にも伊賀、信樂、唐津は見苦しく、高取、膳所、丹波は較上作なり。詳しくは其の國々の條にて述ぶべし。

薩摩――忠度
高取――秋の夜　手枕　横嶽　染川
肥後――肥後薩摩　甫十瓢箪　遠州切形
丹波――生野
膳所――大江　白雲
備前――布袋　さび助
伊賀
信樂
御室――仁清
唐津――玉簾　思川
伊部――走井　關寺
宇治田原――一筋なだれ
朝日

九　志野燒

志野燒の特徵

志野燒は、文明年間將軍足利義政の臣、志野宗臣に造らしめたるものなり。宗信茶道を能くし、香を樂む。自ら意匠を凝らし、瀬戸の工人に命じて茶器を造らしむ。器は輪廓肉厚く、質粗糙にして、濃き白色釉を施し、龜甲紋の劈痕生じ、書くに黒褐色を以てす。其の書竹木分明ならざる粗書にして、頗る雅致に富む。點茶家の愛する所のものは、香合の寶珠、茶碗の卯の花垣なり。また繪樣のなき無地志野と稱するものは、奇品として珍重せらる。後世その法を傳承して今日に及べり。されど、志野燒は陶法の上には、何等見るべきものなくその賞讚する所は、雅致に富めるにあるなり。

志野燒の特徵　志野燒は土至つて細かにして輕く、地の土はしまりて居れども浮き立てるやうに見え、上手の作り方なり。皆手作にて、剃刀にて肉をけづり、高臺は篦にてそぎ取り、轆轤には一切かけざるなり。故に志野古作には轆轤目なし。土色は一體に白なれども、往々黒き曇りのあるもあり。上作には白土眞白にはせて、白藥に赤み出で、墨繪も赤くなれるあり。この繪の赤くなる所、志野の價ある節なり。藥留りの一體に丁寧ならざるは、手つくねの爲めなり。高臺は多く低く、偶ま高きもののあるは貴し。また底の際に、傘の骨のやうに篦目を入れたるは貴し。この白藥赤くならず、繪の赤くならざ

るを直すために、近來二度釜へ入れて赤みを出すこと行はる。これを見分くることは口傳。白藥をはがして取り、紫土、黄土を引き、上に尾張燒の白藥を引て釜に入るゝより、地赤なれども。黑藥の赤くならざるなり。これ最初の黑繪土にしみ入るゆゑなり。又二度釜は乾き强く、さら〳〵とする氣味あり。これもふきこめば見違ふことあれども、總じて二度釜は甚だ輕し。黑藥赤くならざるを以て見分くるなり。

志野燒の香合手重なければ安く、小さくとも丈高ければよし。先づ大なるよし。水指類の矢筈口、共蓋赤みあるは上出來、志野地藏丸の手古作もあり。また下時代もあれど、繪は黑き方なり。志野も織部も、古きは水に浸すとも水引かず、次ものは水引きて重くなる。

十　織部燒

天正年間、足利氏の臣古田織部正重然なるものあり。茶道を能くし、自ら意匠を凝らし、瀨戸の工人に命じて、一種の茶器を作らしむ。世之を織部燒といふ。質は大抵志野燒に似て柔かく、上に靑又は黑釉を施し、草花を畫き、或は靑釉を器一面に用ひ、白にて菊花を拔き顯す。或は靑又は黑釉と白とを折半に

用ひ、尤も精巧を極む。世人の頗る賞讃する所なり。爾來瀨戸の工人、其の法に倣ひて製造し、以て今日に及べり。織部燒に巧なる工人には、春慶の末孫春山、春仙、春曉あり。近くは春岱を以て妙手とす。

織部燒の特徴　織部燒は、土は土器色の白土なり。細かにして洲あるが如く、澁紙手の土の如く、志野燒の第二番の土の如し。例へば黄瀨戸は白土なれども、カン〳〵といふ心持あるに、織部燒はホト〳〵とする心持するが如し。志野は拈土といふが如く、織部はなま土といふが如し。織部は土をよく練りて、情心を拔きたるものなり。白土なれども、大抵土器色せり。火加減により赤くもなれども、志野に比べて土重し。織部燒の向付、手鉢などには、形を作りて後、布にて押へたるより、布目を存すれども、香合にはなし。古織部は繪太くして、萠黄藥あるを貴ぶ。白藥、黑藥、赤みもあるべく、萠黄藥のうちに、ビイドロ藥の入れるもあり。花藥といふ黑藥柿色になるもあり、是はよし。

織部は古よりあるものにて、元來は鳴海燒といふ。織部正以後織部といふ。なほ吉野燒の宗心以後よりいへるが如し。古織部は香合の土を以て作り、瀨戸の藥をかけ、鳴海の釜へ入れたるものなり。織部にはまた黑織部といふが

あり。織部黒ともいふ。總體黒薬なり。茶入もあり。又青織部といふもあり
これは後のものにて、茶入はなし。

十一　瀨戸第十四代後の傳統

元祖藤四郎以後、十三代新右衞門に至る傳統は、前既に述ぶる所の如し。第十四代以後二十七代に及んで、此の名家の跡絶えたるは、我が陶業史上遺憾とする所なり。

瀨戸第十四代を九郎右衞門重行といふ。十三代景重の男にして、父の業を繼ぎ、瀨戸に住す。

十五代を善九郎重高といふ。父重行の跡を繼ぐ。

十六代を重兵衞基德といふ。重高の二男にして、長兄良右衞門景友に代りて家名を繼ぐ。

十七代を新右衞門重德といふ。父の跡を繼ぎしが、弟藤兵衞重承に家を讓りて、早く退隱す。

十八代を藤兵衞重承といふ。又岳翁と稱す。十六代基德の三男にして、赤津に經し、陶業を事とせしが、兄重德の退隱後、家名を繼ぐ。當時名工として知

らる。寛永十七年九月二十日歿す。
十九代を仁兵衞重義と稱し、又奇山と號す。重承の男にして、赤津村に住し又新左衞門とも呼ぶ。當時御窯屋と稱し、近世の名工として知らるゝ妙手なり貞享四年八月二十四日歿す。
二十代を嘉仲重英と稱し、又源相と號す。重義の長子にして、父の業を繼ぎ名を仁兵衞と改む。享保三年正月八日歿す。
二十一代を仁左衞門光重といふ。重英の跡を繼ぎ、仁兵衞光重と號し、法號を柏巖といふ。延享三年十一月三日卒す。
二十二代を彥九郎重孝といふ。光重の後を襲ひ、仁兵衞と呼ぶ。寶曆五年七月十五日逝く、法號を道固といふ。
二十三代を兵九郎景孝といふ。父の業を繼ぎ、仁兵衞と改め、明和九年五月二十七日歿す。法號を寬山と稱す。
二十四代を小平治景勝といふ。父景孝の後を繼ぎ、仁兵衞と改め、安永九年五月二十六日歿す。法號を萬樹と號す。
二十五代を小吉景尙といひ、父の家を襲ぎ、名を仁兵衞と改め、天明二年五月二十一日卒す。法號を萬岳といふ。

二十六代を曾右衛門景典と稱し、襲名後仁兵衛と改む。寛政二年五月三日歿す。法號を永傳といふ。

二十七代を惣四郎春岱といふ。父の業を繼ぎて、仁兵衛と改む。當時の妙手として世に賞せられしが、明治十年三月十八日逝く。これにて瀬戸陶師の家絶ゆ。惜哉。

春岱の子探嶺といへる人あり。今三河寶飯郡萩村龍泉寺に住職たり。

十二　瀬戸新製

瀬戸新製とは、瀬戸舊製の陶器に對する稱なり。瀬戸の地たる、元祖藤四郎の瓶子窯より以來、今日に至るまで其の業を傳へ、製出する所のもの甚だ多く名聲四方に冠絶し、他國他郡に製する所のものも、猶ほ且つ瀬戸物と通稱するに至れり。然れども、由來瀬戸には、陶器を作る法のみ行はれ、磁器を製するの道はあらざりしなり。而して、其の磁器を製するに至りしは、漸く寛政年間に始まる。

本業と新製と

當時尾張の方言に、陶器を作るを本業といひ、磁器を製するを新製といへりとぞ。

新製の由來

今其の由來を稽ふるに、從來瀬戸の制規として、單に戸主の外、一般子弟は

一家を構へて業を専らにすることを得ざりしを以て、家計の困難を訴ふるもの少からず。今を距る百十年、享保二年同國熱田前新田の開築成るに及んで、加藤吉左衛門業を長子に讓り、二男民吉を初め、自餘の子弟を率ゐて此に移住し農耕の業に從ふ。一日開築奉行津金文左衛門新田を巡視し、農民耕耘の狀を検するに及び、その業の拙劣にして、未だ曾て農耕に慣れざる如き狀あるを見て怪んで其の原籍を問ふ。吉左衛門答ふるに、原藉地及び瀬戸の規定を以てし、不幸にして子弟多く困窮の境にあるを訴ふ、津金氏大に之を憫れみ、制規は如何ともすべからざれども、我は幸に南京焼の製法を知る。之を汝等に授くべし汝等是より農を止め、年來習熟せる製陶の業に就き、以て大に國益を謀るべしと慇懃説諭し、且南京磁器の製法を教ふ。吉左衛門意外の福音に接し、日夜勉勵して之を傳習し、較々南京焼に類するものを出すに至れり。津金氏大に喜び是より新窯築造の地、粘土の用意成る。加藤宗家の唐左衛門高景之を聞き、津金氏の恩義に感じ、大に之を喜ぶと共に、將來瀬戸窯に及ぼす影響を案じ、自ら津金氏の邸に至り、一方感謝の意を表すると共に、一方將來瀬戸に及ぼす利害を論じて、瀬戸にも新窯を設けられんことを切望す。然れども瀬戸制規のあるあり、津金氏と雖如何ともなす能はず。乃ち藩府に稟し、國益の增進を計る

民吉肥前に陶法を探る

意味を以て、磁器製造を瀬戸子弟の業に及ぼされんことを請願せり。藩府その情を察し、之を許可す。是に於て瀬戸に新窯を増設するに至る。實に享和二年なり。開始者は卽ち加藤吉左衞門、長男唐左衞門、次男民吉の三名にして、外に換業せしもの十四名ありき。

其の後業稍々進むと雖、未だ賞すべき器を出さず。吉左衞門惟へらく、西海九州の磁器は、精巧他に抽んず、宜しく彼地に遊び、親しく其の奥秘を傳習するに如かず、と己れは老後爲すなきを以て、民吉を遣さんと、藩府に出願す。民吉其の許可を得て、享保四年二月、天草城下東向寺の住職天中和尚を訪ひ、意中を述べて助力を請ふ。和尚は愛知郡菱野村の出身、吉左衞門と舊知なり。その志を感じ、諾して高濱の製磁家植田元作に托す。民吉その工場にある數月晝夜其の業に勵むと雖、その方法、原料の配合等は之を探るを得ざりき。乃ち元作の家を脫し、東向寺に行き、和尚に計り、佐世保村西方寺住職の紹介を得藥王寺住僧の手を經て、松浦家の御用窯燒物師今村茂右衞門の家に行く。會々村長より他國の者を村內に淹留せしむべからずとの通報あり。止むを得ず、藥王寺に歸る。和尚又江長村の製磁家久右衞門に托す。久右衞門更に佐々村の福本仁左衞門に托す。仁左衞門民吉の技を愛し、鄉里に歸るの念を斷たしめんと

勸めたれども成らず、遂に文化四年正月福本の家を辭し、西方寺に歸り、その庇護を謝し、且つ業の成るを告ぐ。歸途有田錦窯を一覽し、更に圓山に遊び、磁器圓窯を改造せる某氏の築造法を知得し、去て天草に天中和尚を訪ひ、其の厚誼を謝し、植田元作に脫走の罪を謝す。別るゝに臨み、元作錦樣の方法を授く。それより同行者一人を携へ、文化六年六月瀨戸に歸り、代官水野權平太氏に屆く、水野氏大に喜び、藩府に上達す。藩府之を嘉賞し、上繪釉及び酒肴料を賜ふ。民吉窯を改造して、燒く所の磁器を獻上す。藩主その精巧を賞し且つ命じて自今舊來の陶業を本業と稱し、新製陶器を染付燒と稱せしむ。又民吉父子には永代苗字帶刀を許さる。瀨戸今日の繁昌は、津金氏の開發にして、吉右衞門の創設、民吉の大成に待つ所多きや知るべし。

爾來磁器を製するもの漸く多く、其の業亦進歩して今日に至る。今の陶工中著明なるは、川本桝吉、川本午助、川本作助、加藤吾作等を以て名手とし、就中川本桝吉は青華磁器の平盤を作るに巧にして、その大なるものは、徑五尺より六尺に至るものあり。又九尺乃至一丈に達する磁製の扁額を造る。本邦に於て能く巨大の礫盋を作るもの、蓋し此の地に過ぐるものなし。その他茶碗等の諸器に至りては、頗る支那の磁器に似、また金襴樣と稱するものあり、肥前有

元贇燒

外山燒
外山は今の戸山學校のある所か

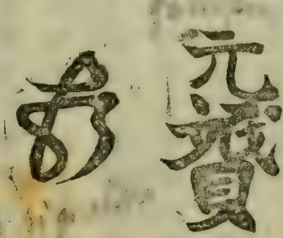
田の窯法に據れるものなり。

十三　瀬戸各種

瀬戸燒に就ては、以上大略記する如くなるが、此の以外尚は逸すべからざるものあり。順次その三四を錄せん。

元贇燒

萬治二年支那人陳元贇、朱舜水、李梅溪、僧心越等明清の亂を避け、長崎に來りて歸化す。將軍家綱諸侯に命じて陳等をその國に居住せしむ。陳元贇尾張に來り、名古屋に住し好で自ら陶器を製す。土は瀬戸より得、安南の陶器を模す。呉洲を以て詩書を描き、上に青白色の透明なる水釉を施す。頗る雅致に富み、上乘のものなり時人賞讃措かず、稱して元贇燒といふ。後之を瀬戸の工人に傳へ以て今日に及ぶ元贇は寛文十一年六月九日逝く。



外山燒

外山燒は元祿年間に始まる。尾張の國主、瀬戸の工人加藤仁兵衛、加藤太兵

此所は尾張藩の下屋敷ありし所なり

萩山焼

正木焼

衛、加藤唐三郎の三名を江戸屋敷に召し、庭中に窯を築きて、各種の器を作らしむ。暫くにして廢絶し、後又寛永三年再び工人を彼地に召す。再び中絶し、享保元年再興、爾來天保年間まで繼續せり。外山は德川氏江戸屋敷中の一名稱なり。依て此の名あり。

萩山焼

嘉永年間萩山金吾なるもの、愛知郡御器所村字七本松と稱する所に窯を開きて、陶器を製し、自ら萩山焼といふ。器の裏毎に印款あり。金吾は尾張の藩士御庭廻役を務めしが、御庭焼の廢絶せられたるを見て、深く之を惜み、請ふて此の地に移り、陶器を事とす。質一種の樂焼に似て、土滑かに、色赤くして、宇治焼又は靜岡の賤機焼に似、軟弱なる所あり。上釉も赤く、之に本窯繪を白又は青釉呉洲を以て描けり。高尚のものにあらざれども、赤樂茶碗に至ては、大に雅致に富めり。

正木焼

尾張藩士正木宗三郎、性陶器を好み、仕官の傍陶器を製し、瀬戸の窯にて焼かしめて樂とせり。其の製古瀬戸の法に倣ひ、點茶器多く、雅致風韻に富み、上物なり。器の裏面には、正木又は星崎の  銘印あり。時人大に之

九郎燒



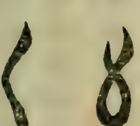
を賞讚し、競ふて之を請ひ求むれども、賣品にあらざるを以て、世に殘れるもの少し。

男正木伊織、父に肖て陶器を好む。父の歿後家を繼ぎ、大番役を務む。好で緻密なる作物を造る。多くは香合を造り、其の裏面に正木の印を捺せり。作品は父に優れて優雅、世に賞讚せらる。今日名古屋地方には、稀に其の作品を見る。

伊織の男南湖を三代正木といふ。多く點茶器を作りたれども巧親に及ばず。又書を能くし、一時瀨戸陶工園に畫工たることありしといふ。其の後居所を明にせず。

九郎燒

尾張國主德川齊朝公の臣平澤清九郎、後に九郎と改め、茶道を好み、また陶器を造る。作品雅致に富み、且つ高尚なるを以て、時人の賞讚を博し、九郎燒の名遠近に傳はる。されど固と仕官の身、非賣品なりしを以て、世の求めに應ずる能はずして已みにき。九郎茶道に於ては、今昔庵と稱し、陶



器に於ては、織部及び志野を模し、土質滑かにして緻密、轆轤を用ひず、手作りなりしを以て厚手にして重し、裏面に必ず上

揭の印を捺す。弘化元年歿す。

男松柏亦茶道に明かに、また今昔庵に倣ひて陶器を作る。雅致高尙、世の賞讚を受く、裏面に印あり。作は初代に優る。

白壽燒

九郎の友、千村白壽も亦尾州公の臣なり。仕官の餘暇陶器を製するを樂み、上好のものを出せり。裏面に白の字印あり。

平尾燒

文化文政年間、尾州藩士平尾數也の製する所。仕官の餘暇陶器を製して、友人に頒ち、樂みとせり。老後心空庵と號し、益々製陶に勵む。或は曰ふ、數也の祖先は明人の歸化せるものと。

風造燒

寬政中九郎の友一江利右衛門の燒けるもの。陶法を平澤に學び、製する所のもの九郎に讓らずといふ。

宗玄燒

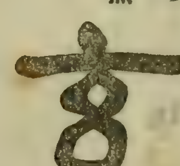
尾州公の臣渡邊兵庫頭なるもの、故ありて壯年の時退隱し、專ら茶事と陶器製造とを樂む。時人之を賞讚して宗玄燒といふ。號を樂々軒又は日庵といふ。

見心焼

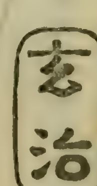
有我焼

正三焼

製品の裏には下記の諸印を押す。上好のものなり。後名古屋の東北端大曾根に窯を築き、こゝにて製する所のものには、必ず二重丸に大の印を用ひたり。

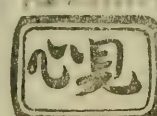






見心焼

尾州公の臣杉山三右衛門、見心と號し、仕官の餘暇自ら陶器を製するを樂む。その製品九郎の右に出で發明する所も多かりしが、世に公けにせず、今世に存するもの稀なり。裏面に見心の印あり。文政年間の作なり。



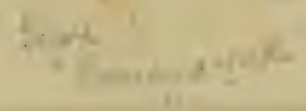
有我焼

嘉永年間のものなり。名古屋の人増田三郎右衛門なるもの、有我と號し、通稱を宇治屋三郎右衛門といふ。古物を業とし、茶道を好み、當時の宗匠宗也と交り茶道にも明かなり。また性陶器を好み、城北上宿に窯を築き、その製品を友人に頒ちて樂みとせり。世人稱して有我焼といふ。雅致に富み、上好のものの多し。

正三焼

宇治屋三郎右衛門と鏡屋正七との合作にて、楕圓輪に正三の印を捺す。雅致

蓮也焼　金谷焼　日義焼　蘆山焼



にして上好のものなり。

蓮也焼

剣術の遣手柳生は尾州公の臣にして、兼ねて茶道を好み、蓮也といふ。別に貞操或は巖包の號あり。仕官の餘暇陶器を作り、自己の用となし、友人に頒てり。

金谷焼

滋賀の人金谷なるもの、修験法印にして、諸國を遊歴し、京都に出で、蕪村に畫を學び、安永中名古屋に來り、住吉町に居をトして、逸人と交る。金谷姓を横井といひ、又斧叟と號し點茶を好み、製陶を善くし、自ら用ふる所の茶器は、必ず自ら製し、印を押す今世に存するもの稀なり。



日義焼

名古屋法藏寺の住僧日義の製するもの、主として織部、黄瀬戸の風に傚ひ、裏に日義の印あり。頗る雅致に富み、九郎、見心に劣らず。日義は文化後の人深く點茶の道に通じ、退隱後一庵を設け、爲足庵と稱し、好んで陶器を製す。

蘆山焼

秋二焼

六作

通稱山田權平、名古屋に住し、茶道に明にして、また陶器を造るに妙を得。陶器は世人の賞讃を受け、蘆山焼の名あり。今存するもの少く、且つその年代を詳にせず。

秋二焼

尾張海東郡津島町の人、大橋秋二なるもの、松庵と號し、性陶器を好み、陶法を京都の五條周平に學び、兼ねて茶道を能くす。陶器は五條焼に似、また岩倉、仁清にも似たり。晩年美濃養老に退隠し、茲に窯を築きて、専ら陶器を製作し、山菊を描きて友人に贈る。

十四　瀬戸六作と十作

永祿六年、織田信長尾張瀬戸に巡遊せられたる時、瀬戸陶工中六人の優れたるものを選び、六作と稱して、特典を授けられ、水上、大平二村に窯場地築造の許しを與へたり。爾來六作の名高く、その作品亦大に世に珍重せらる。六作とは左の六人なり。



俊白（京都の宗伯とは別人なるらし）



茂右衛門



長十

古作

丁ハ又へ　新兵衛（京窯の新兵衛は此人ならん）

口　市右衛門


宗兵衛

瀬戸十作とは、天正十三年古田織部正重勝の選にて、名工十作を定められしものをいふ。その人名及び窯印は左の如し。

七　半七

サ　六兵衛

山ハ又 　吉右衛門

田　金九郎

セ　治兵衛

カ　八郎二

の　佐介

イ　丈八

一　元蔵

⊖　友十

瀬戸六作、十作のことは世に名高きことなれども、其の傳統の詳かなざるは誠に遺憾とする所なり。新兵衛、茂右衛門は利休時代京住陶工にも同名にて傳はり、俊伯の印は同時代京住作者の宗伯のそれと同一なり。その他彼是紛はしき節多けれども、こゝには只其の傳説を載せて考古の資に供するに止む。

犬山城　成瀬隼人正の居城たりき、明治

豊助焼　又豊樂焼といふ

京都樂焼の一種なり。文化年間名古屋隠れ里に於て、豊助の焼き始めたるものなり。豊助は豊樂と號し、茶道を曲全に學び、俳諧は吉原黄山に學ぶ。陶器は京都の尚古齋に似て胼あり。上に青釉を施し、又器の外面に漆を塗り、之に蒔繪を施し、或は素焼となして、土の色變りを用ひ、墨流れの如き自然の班紋を顯はし、或は看板書にて、菊の盛上などを爲し、又は彫刻するものあり、製法頗る精巧を極む。天保年間藩主齊莊公の御用陶器師となり、土風呂を製す。藩主自ら豊樂と揮毫して銀印を賜ふ。因つて天保後の製品には、此の印を用ひその以前の作には、無印にて多く刻銘せり。爾後業を傳へて今日に及び、明治の世、海外貿易の開くるに及んで、大に歐米人の好む所となり、一時盛に輸出せしが、今は專ら樂焼の點茶器を製す。

犬山焼

尾張丹羽郡犬山町にて製造する所の陶器なり。一に丸山焼といふ。文政年間犬山城下丸山と稱する所に始めたればなり。器は支那呉須及び赤畫を模造した

四年廢藩後稲置村に屬せしが今は犬山町となる

火襷 藁を卷きて以て釉に換へたるもの

るものにて、又京都尾形乾山の風に倣ひ、櫻楓を書き、主として酒器類を製す質堅くして灰色を帶び、上藥も亦灰色なり。裏面に犬山の捺印あり。時としては書きたるもあり。書きたるは古作なり。犬山の音、乾山に通せるより、尾形の風に倣ふて今にその窯傳はり、盛に酒器、茶器を製す。明治十年後盛に海外に輸出したりしが、今は較衰ふ。

常滑燒

尾張知多半島の西海岸、常滑町に產する陶器をいふ。その始めは元祖藤四郎の來て開窯せしものと傳ふれども、確かならず。今世稱する所の常滑燒は、天正年間に始まるといふ。その質甚だ粗にして、赤色を帶び、釉法も巧ならず、茶褐色のものあり、黄色のものありて、恰も南蠻陶に似たり。最初は素燒の瓶類のみを出せしが、後稍や進歩して、眞燒と稱する黑色の南蠻風のものを燒き專ら酒器、急須などの日用雜器を製したり。後更に發明する所あり。鮫燒又は火襷など丶稱したれども、上好のものを得ず。降て文政年間董齋なるものあり南蠻を模造し、大に茶人間に持て囃さる。天保年間、陶然、八兵衛などの名工出で、大に面目を改む。明治の初年、支那人金子恒なるもの、漫遊の途次此の

陶然

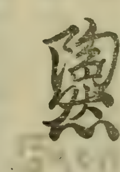


村上八兵衛

三光

地に來り、米泥白泥の製法を傳へてより、專ら急須を製し、世の賞讃を受く。當時急須の多く出づる、全國第一と稱せらる。近時の良工には、三光、二代陶然、壽門堂保平などあり。また龍卷朱泥の花瓶を發明せるものに下田圭素あり今日は下水用土管を製し、大に都市の需要に供す。

陶然　通稱を赤井新兵衛と呼び、陶然はその號なり。尾張公の御風品師として當時名聲高かりしが、天保中常滑燒の改良に力を盡し、常滑をして今日の盛を致さしめたり。終身無妻にて暮し、晩年同地北條山に退隱し、明治十三年十一月歿す。



村上八兵衛　白鷗と號す。和歌を能くし、常に京都の堂上方に出入し、又茶事を樂み、風雅に志せり。故に其の製造に係る陶器は、何れも雅致に富み、眞燒多し。天保三年四月歿す。

三光　通稱を松下恒義といふ。京都高橋道八に陶法を學び、常滑に歸りて、同地の陶器改良に努む。明治二年歿す。

其他の尾張陶器

尾張には陶窯甚だ多く、殆ど枚擧に遑あらざらんとす。前各條記する所の外

尙二三を紹介せん。

五郎焼

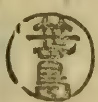
五郎なるもの、文化年間愛知郡川名村に開窯せし陶器なり。五郎は名古屋と瀬戸との間なる大森村の人、弘化年間瀬戸の素仙堂に學び、後近江彦根城主の招に應じて至り、城中の庭窯に於て、種々の器を造る。後尾張に歸り川名村に業を起して、多く磁器を製せり。その法瀬戸新製に傚へるも、幾分永樂の風ありて、京窯に似たり。又銅版の畫を用ひたるを以て、一に銅版焼の名あり。今廢窯せり。

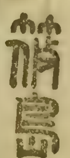
大高焼

明和年間、知多郡大高村に山口余延なるもの丶焼けるものなり。製法京都粟田焼に傚ひたれども、粟田の如く緻密ならず。されど、自ら一格を備へ、高尙にして雅致あり。余延は元來書畫に巧にして、大雅芙蓉等と交り、親しく芙蓉等の筆に成れる繪多し。今傳はらず。



笹島焼







名古屋の西部笹島と稱する所にて、朴齋と號し、文吉と通稱するもの丶窯より出せるも

五郎焼
大高焼
笹島焼

不二見焼

古戦場焼

の、製法楽焼に似て雅致に富める酒器を主とす。器の裏には笹島の二字を印せり。今廃絶に帰す。

不二見焼

名古屋藩士村瀬八郎右衛門美香なるもの、仕官の餘暇文墨を弄し茶事を嗜み兼ねて陶器を愛す。明治の初年同市前津町に居を移してより、専ら風流を事とし、庭園に小窯を築き、茶器を焼て楽しむ。製品には初め望岳と書せしが、晩年不二山人と號し、その四字又は不二の二字を凹書せり。楽焼に似て、雅致に富めども、賣品にあらざりしを以て、多く世に傳はらず。



その子亮吉亦不二山人の遺法に倣ひ、茶器の外に飲食器を製して、世に頒賣せり。世に之を不二見焼といふ。その自作の品には、不二の二字を凹書し、職工の製品には、不二の印を欵して、之が別を為せり。

不二見焼に類せるものに古戦場焼あり。知多郡桶狭間附近に出せるものにて古戦場の三子を欵せり。慶應年間その窯ありしが、暫くにして廃絶せり。

夜寒焼

名古屋市伊勢山町より出せるものにて、雪中の粗松を書き、不二見焼に類す

三　河

岡崎永樂

慶應の末、明治の初年に亘りて、京都永樂善五郎和全三河國岡崎に來り、高須某と計りて一窯を開き、赤繪金襴様の磁器を製せり。作品凡て永樂風のものなりしより、世に之を岡崎永樂といふ。暫くにして和樂京都に歸る。爾後其の弟子業を嗣ぎしが、今は遂に廢窯せり。

文政頃の作品なりと覺しき花瓶に、「御國產牡若」の印あるものあり、岡崎藩の庭燒ならんといふ。又急須に「八橋造」「森由」「永翁」などの印あるものに、三河產のものあり。何れの作にて、何人の手に成れるやを詳にせず。

燒物御朱印

傳馬御朱印

遠江

志戸呂燒

志戸呂燒は、太永年間遠州志戸呂村に於て、始めて之を製す。志戸呂は大井川の上流、無間山の麓にて、今の榛原郡五和村の一字なり。當時專ら葉茶屋壺又は花瓶を造り、間々他の諸器をも出せしが、後業甚だ振はず。惟ふに、尾張瀬戸の工人等、大永中此の地に來りて、業を開きしものなるべく、爾後約五十年を經て、天正十六年陶業差許しの朱印を賜はり、同時に傳馬一疋差出すべき命令書の今日現存せるを見れば、事業の連續しつゝありしを知るに足らん。

燒物御朱印寫

遠州志都呂に致在留候瀬戸之者等、於御分國中、燒物商賣役等被成御免之所、不可有相違旨、被仰出候者也、仍而如件

天正十六年後五月十四日　淺井雁兵衞

瀬戸者等

傳馬御朱印寫

傳馬一疋白金屋駿府迄可出者也仍而如件

戊子壬五月二十日

淺井膳兵衛

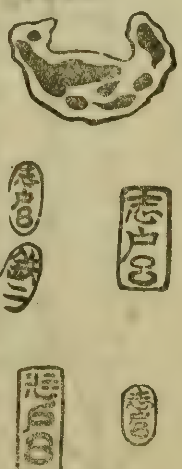
奉之

右宿々中

志戸呂の古作

寛永年間、點茶家の宗匠小堀政一、此の地の工人に勸めて、茶壺を造らしむ依て業再び盛なり。土質は粗にして淡赤、釉色は濁黃にして黒色を帶び、瀬戸の破風窯に似て、陶質はそれよりも堅實なり。爾來引續きて今日に及び、多く雜器を製するに至りたれども、仍能く古體を失はず。而して、今日の志戸呂燒は、同じ五和村の内なれども、志戸呂の隣地橫岡より出づるなり。

志戸呂燒の古作は、黒鼠に黃の胡麻藥砂利土にて少しく厚作なり。印は無く、箆にて地名を彫り付けあり。之を俗に古唐津と傳へ來る。その印あるものは、多く後年の作なり、印には種々あれども、皆地名を刻せるに過ぎず、偶まゝ工人の名を印せるも必ず地名を欵せり。右に載せたる印は、その例なり。又遠州時代前のものに上掲の如き印を捺せるものあり。多くは黒金氣藥の茶碗の高臺に之を見る。其の何の意たるやを辨じ難し。

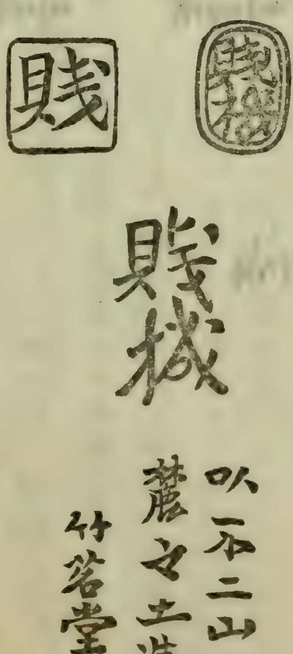




駿河

賤機焼

賤機焼は駿河府中(今の静岡市)の邊にて製すといへるも、其の年代及び創者を詳にせず。或は曰ふ、徳川氏の初代、尾張瀬戸の人三名遠州濱松の近傍、引佐郡井伊谷郷に轉住し、陶業に從事す。家康の駿府に移るや、亦從つて駿府に赴くも、陶事に適するの地なきを以て、遂に居を志戸呂にトせりと是れ恐らく眞に近きものならん。即ち賤機焼なるものは、志戸呂焼の工人、志戸呂に窯を開ける前、駿府賤機山附近に窯を設けたるものをいふなるべし。



賤機焼は、一種の樂焼にして、交趾に似て、各種の色釉を用ひ、土質は石州の綾焼、尾州の萩山焼と能く似たり。世に稀なれども、賤機の印あり。

武藏

武藏の地、從來陶磁器の產出あることなく、土器は僅に今戶燒、隅田川燒を特產とし、其の他本所に樂燒の日用雜器を業とするもの數戶、又瓦器の卉盆、襍器を製する一二工人ありしのみ。天明年間伊勢の沼浪五左衞門、幕府の命を奉じて江戶に來り、小梅近傍に陶窯を開きしも、一代にして廢絕し、此の他、水戶侯邸內に御庭燒と唱へ、樂燒及び軟陶に後樂園の銘を印して世の珍玩する所となりしも、固より賣品にあらず、遊戲上より成立ちたるが故に、市場に之を見ること稀なり。

後樂園燒

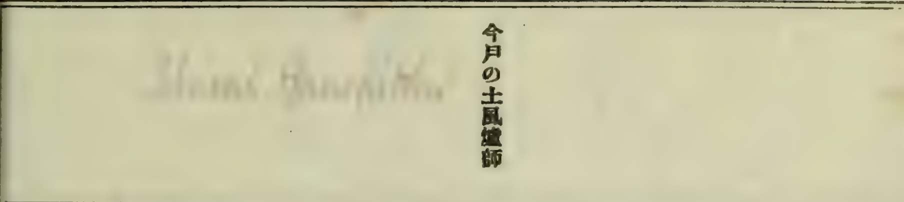


龜山邸の窯



文久三年、福島政兵衞なるもの、瀨戶傳を以て、豐島郡箕輪村なる龜山侯邸地に、巨窯を築き、盛に陶磁器を製せしも、一年許にして、地所に故障を生じ遂に中廢せり。

明治維新前後より、東京の市內、久良岐郡太田村(今の橫濱市太田町)に陶窯の創築あり、また東京各所に陶器繪付けなるもの〻行はれたれども、盛衰一ならず、殆んど中廢に歸せり。



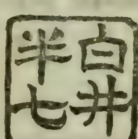
今戸の土風爐師

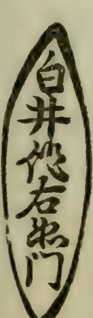
今戸燒

今戸燒は、今より三百三十餘年前、天正年間豐島郡今戸村に於て創始さると傳ふれども、詳かならず、今戸村は今の淺草區地方今戸町なり。古老又傳へて曰ふ。下總國千葉家の族某、武藏國淺草石濱或は今戸村に土着し、瓦及び土器を造り、以て業となすもの十餘戸ありし、と而かも尙ほ其の姓名を詳にせず

貞享年間、土器の工人白井半七なるもの、點茶用土風爐を製し、又火鉢等の種々の器を造る。世人之を今戸の土風爐師といふ。尋で其の地の工人、之に倣ひて業を開くもの漸く多し。

享保二年、二世白井半七、始めて瓦器に釉水を施し、樂燒に似たるものを製す。爾來工人の之れに倣ひて業を開くもの數十戸、多くは食器にして、雜器は極めて少し。世呼んで今戸燒といふ。三世又白井半七といひ、四世五世亦白井半七といひ、共に蘆齋と號す。初世以下數世、皆土風爐及び樂燒を製し、年序を經て漸く盛んなり。また玩弄物婦女の塑像を造る、伏見人形に似て、それよりは麁朴なれども、其の間自ら奇作愛すべきものあり





今戸燒人形

好事の輩、今戸燒人形と唱へて之を愛玩す。

半七の支流に、白井作右衞門あり。亦能く土風爐を造る。

御土器師

寛政中、中條某土器及び神供の瓶子を造る、德川幕府中條某を御土器師とし之を製して進せしむ。

嘉永年間作根辨次郎なるもの、點茶用土風爐の製作に巧なり、當時上工と稱して、之を賞し、業愈々盛んなり。

土器瓶子の調進

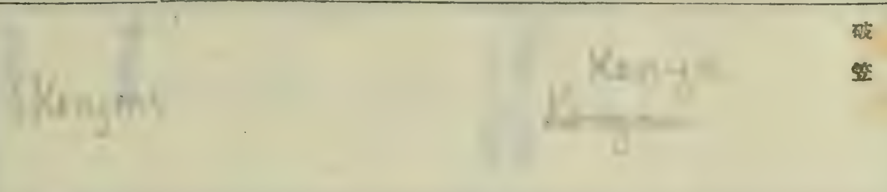
明治年間、六世白井半七業を繼ぎ、土風爐を作り、また樂燒を能くす。最も名聲あり。又土器師中條二世の孫、中條市太郎なるもの、土器及び神供の瓶子を作る。明治天皇江戸を以て東京と爲し遷都のことあるに及んで、土器、瓶子を宮中に調進し、爾後今に至て之を獻ず。



次で瀨戸の工人井上良助此の地に移り、種々の器を製す。尤も良工にして名高く、爾來之に傚ふて、磁器の類も之を出すに及び、土器、樂燒、塑像を製するものと合せて、四十餘戸に及び以て今日に至れり。

乾也燒

天保年間、江戸に三浦乾也なるものあり。尾形乾山の陶法に傚ひて、之に破



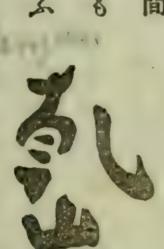
笠の風を模し、內窯にて種々のものを燒く、實に妙手にして、大に世の賞讚を受く、乾山のことは前卷に詳しく、破笠は天保年間の髹漆工、好んで樂燒の草花、小蟲等を手製し、之を漆器中に嵌して塗りたるもの、世に著はる。

乾也は爾來繼續して、明治の世に及び、技益々熟して、釉畫の眞に逼るもの多く、陶工にあらざるものも、之に倣ふて窯を立つるもの多きに及べり。窯は徑一尺三寸、高さ一尺餘內窯徑七八寸、高さ五寸餘の小形にして、室內にても容易に之を製することを得るを以て、內燒又は內窯の稱あり。概して釉色妍美にして、精巧なり。



乾山燒

京窯の陶工尾形乾山、江戸に來りて製陶に從事せしことは、第一卷京燒の條に述ぶる所の如し。頃は享保年間にして、場所は定かならざれども今の下谷區入谷の邊なりしといふ乾山年八十一歲、寛保三年を以て



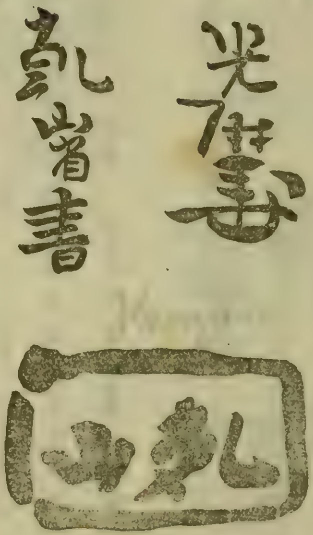
逝く、晩年江戸の地を去て下野に赴き、此所に亦開窯すといふ。乾山去りし後、其の弟子乾也、別に一派を

祿山

光琳の筆

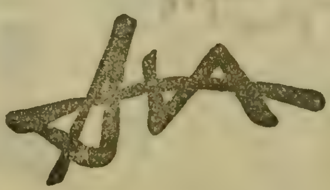
弱き、其の他のものは、皆師の名を以て製陶し、產額甚だ多かりき。その中祿山の名最も著はる。祿山別に自己の名を印して、世に出せるものあり。

乾山は書家光琳の弟なるを以て、陶畫は光琳風を模し、また光琳の筆に成れるもの多し。



水野燒

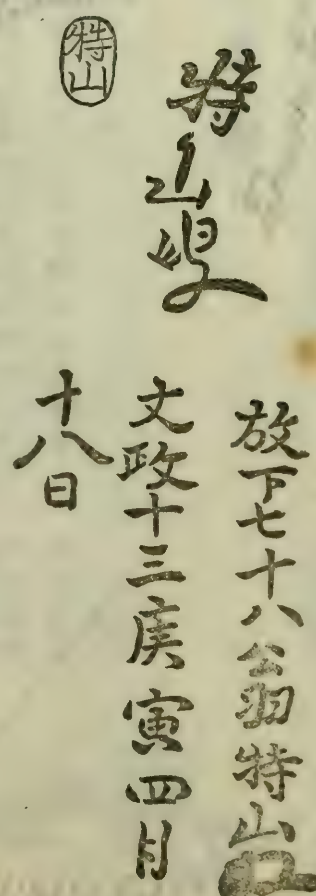
天保年間、江戸辰の口(麴町區和田倉門外)に於て、道太郎の名を以て製せるものにて、茶式に用ふる樂燒なり。水野燒といへるは、水野出羽守の邸內にて作りしを以てなり。下掲の如き書判を用ふ。



特山燒

文政の頃、駒込千駄木光源寺住職特山なるもの、近江信樂の土を以て、樂燒

茶器を造る。印に特山と銘せるものあれども、多くは書き記せるものなり。出來案外に善く、當時茶人の間に持て噺されたるものなりき。



吉向燒

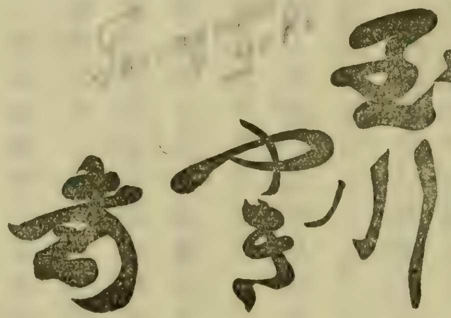
安政二年、吉向大坂より江戸に來り、向島に開窯す。（前卷攝津の條參照）文久元年吉向の死後、養子一郎之れを繼ぎ、四年にして卒す。年四十四、寡婦その後を繼ぎしも、明治元年を以て廢窯せり。製品には墨水邊と書し、吉



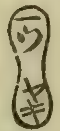
向の印を刻せり。吉向製品は、攝津、周防、信濃に於てせるものは佳、向島にては終に良好のものを得る能はざりき。

玉川燒　魁燒

嘉永の頃、江戸の近郊、矢口の里に開窯して、樂燒を出せり。之を玉川燒といふ、淸楚愛すべき佳品多く當時世に用ひられたりき。印に「一ツヤキ」、玉川紫水などあり。







魁燒は、文久三年、北根岸本田邸に開窯し、陶工を京都より招きて監督せしめたるものをいふ。製品は固き樂燒に、黒と青との藥を掛けしものなりしが、暫時にして止みにき



魁燒

江戸萬古

天明年間、伊勢の一商沼浪五左衞門、幕府の命を奉じて江戸に來り、本所向島小梅近傍に陶窯を開き、製

竹本窯

江戸川製陶所

成瀬窯

篠原能孝

出する所のもの、之を江戸萬古と稱すること、萬古燒の條に詳かなり。

明治後の東京陶器

明治の初年、竹本隼太なるもの、四谷荒木町なる松平攝津守邸内にありし窯を購ふて、小石川高田豐川町に移し、古今の陶器上釉を研究し、大に得る所あり、支那天目窯其の他の釉も、自由に製することを得、妙手の評ありしが、後世を去り、其の男之を繼ぎしも、今は廢絶せり。

明治十年小石川に江戸川製陶所の設立あり、歐洲の法に傚ひて、石膏型を用ひ、陶磁器及び砂器を創製す。全國の陶工今日石膏型を用ふるは、皆術を此に受けしものといふ。

明治四年、成瀬誠志なるもの、芝増上寺山内に築窯し、薩摩罌器に傚ひ、一種の畫風を彩描して、盛んに輸出品を造りしも、前年來薩摩本地の陶器、聲價を墜せし餘響を受け、損益相償はざるの悲境に陷れり。而かも耐忍維持に努めたりしが、明治十四年祝融の災〔誠志〕に罹り、其の地官有に歸せるを以て、再築を得ず、單に薩摩本地の製器に着畫することを業としたりき。

明治十一年、篠原能孝なるもの、小窯を四谷東信濃町に築きて、また磁器を

製せり。

友玉園

明治十五年六月、農商務省地質調査所に於て、獨逸人ワグネル氏の創意に係れる陶窯を牛込新小川町に築き、江戸川製陶所の工長加藤友太郎をして之を掌らしむ。翌十六年六月、終に友太郎の有に歸し、友玉園と稱して、陶磁器を製せしが、今は在らず。

小野窯

明治十六年八月、小野義臣淺草橋場の私邸に一窯を設け、遊戯を兼ねて、揑塑品を製せんとし、江戸川製陶所の工人たりし加藤太兵衛を之に與らしめて築窯す。成る所のものは、成瀬窯のそれに似て、彩畫器なりしも、間もなく中廢せり。

繪所

明治六年、墺國維也納府に於て、萬國大博覽會の擧あるや、我が博覽會事務局にて、肥前の有田、三河內、尾張の瀬戸等より素燒を購ひ來り、一の繪所を置き、菅蒼圃、服部杏圃等を主幹とし、陶畫工を召集して、鮮麗精美なる彩畫を描かしめ、以て出品に充つ。集るもの若干人、不破半次郎、松本芳延、岸雪圃、小花和一樂、曾我德丸等之が魁たり。其の畫大に外人の賞讃を博せり、

東京繪付

是れより先、東京繪付なるものあり、細小なる湯呑、酒杯等に金銀紺靑。その他の數彩を用ひて纖描し、尺餘の錦窯に投じて燒着すること行はれしも、此擧

瓢池園

宮川香山

や實に大仕掛のものなりしなり。尋で墺國博覽會出張の松尾儀助、若井兼三郎の發企によりて、工商會社を設立し、英國アレキサンドル、ヤパレース商會の依托に基き、本邦新古の物產を英國へ輸出するに際し、七年東京繪付の陶磁を送り、九年米國博覽會の擧あるや、同會社より復た之を出陳して、愈聲價を高め、畫工の伎倆も亦著しき進步を呈せり。

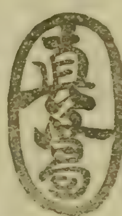
次で繪所の廢せらるゝや、當時在官の河原德三、此の團結せる工人の解散を惜み、有志者を慫慂して之を主管せしめ、以て其の業を繼がしめたり。彼の瓢池園なるもの即ち是れなり。瓢池園の作品は、爾後第一回、第二回の內國勸業博覽會に出品し、其の他佛蘭西に、墺太剌利亞に、凡そ大博覽會のある每に、必ず之を出品し、每に激賞を受けたり。爾後此の畫法次第に蔓延し、之に依て營業するもの、東京橫濱間に最も多く、尋で他の府縣にも波及するに至れり。

太田燒

太田燒は武藏久良岐郡太田村に開窯せるものをいふ。太田村は今橫濱市に編入せられ、太田町といふ。明治四年、橫濱の一商鈴木保兵衛なるもの、同港に出入する外國人の薩摩釉畫を求むる一に多きを見て、京都眞葛ヶ原の陶工宮川

香山を迎へ、此に一窯を築き、原土を薩摩に取り、勉めて薩摩錦襴を模造す。茲を以て薩摩本陶竟に其の聲價を喪ふに至れり。香山の祖先は代々京都知恩院門前石橋町に住し、樂燒を業とし、今工香山の祖父に至り、木米に其の製法の傳授を受け、勉勵業を營み、始めて磁器を製出するに至れり。次で其男亦其の門に入り、眞葛ヶ原に於て、仁清製式の陶磁器を本窯に燒くの術を得て、順次今戸に繼げるもの。故に香山は此狀態を見るに忍びず、如何にもしてその本技を現さんとし、佛國磁器の生花を模造し、草木の枝葉、花蕊、禽蟲の羽毛、嘴脚の類に至るまで精密纖致殆ど眞に逼れるものを造り、之を花瓶、飾壺等に裝着し、家鄉眞葛ヶ原の名を以て世に出せり。稱して之を眞葛燒といふ。明治九年米國大博覽會の開催に際し、其の製品を出陳





して好評を得其の巧妙世上に囂々として輸出亦夥しく敢て價値の高低を問はざるに至れり。然るに、香山や己れの技倆に任せて、猥りに形を製し、工を施す、動もすれば奇怪に渉り、氣韵を失ふと共に、極めて危險にして、運搬に適せざるもの少からず、之が爲に實用に適せず、との譏を招き、輸出の道を狹からしむるに至れり。豈遺憾ならずや。晩年現業を嗣子に

譲り、己は其の好む所の和漢古陶磁を模して楽めり。

秩父地方の陶窯

武蔵の秩父地方、即ち今の埼玉縣入間郡、比企郡、秩父郡には、上質にはあらざるも、陶土を産すること多きを以て、近世土器を産したりき。飯能地方の天保年度に開窯せるもの、熊井村の天明年度に創始せるもの、松山村の安政年度に創製せるもの等、その重もなるものなり。維新後新陶の各地に起るに及んで、亦その顰に倣ひ、新に開窯せるもの、在來のものを改良せるもの等あり。今は相應の産出を見るに至れり。

飯能の陶器

入間郡飯能町の陶器は、天保元年同地の双木清十なるもの、同町愛宕の産土を取りて、製造したるに始まる。當時その製品を江戸地方に販賣したるに、質弱くして、好評を得るに至らず、其の男新平大に之を憂ひ、改良に苦心を重ね嘉永年間同郡苅生村赤根峠の産土を調合し、較々好成績を得たり。孫佐七は今工なり。明治十五年之を継續し、東京に賣捌人を置き、飯能物産として、之が販路を廣めつゝあり。

松山の窯

比企郡松山町の窯は、安政六年横田彦兵衛の江州信楽焼を傳習し來りて開け

るもの、當時は此の地方の原土を以て、土器を製出したるに過ぎざりしが、爾來苦心改良を重ね、今工次郎吉に至りて、稍見るべきものを出すに至れり。

熊井の窯

同郡龜井村大字熊井の窯は、天明五年の創始に係り、淡路の醫師澤玄堂なるもの、當時此の地の根岸仙三郎の家に寄寓し、樂燒を談ず。仙三郎陶器に志あり、之に依て、始めて其の傳を得、之を創始したり。然るに、その產額極めて僅少、附近に纔つに止まる。文政二年其の子儀兵衞、更に熱心樂燒を製せり。天保の末年根岸喜一肥前の陶工山口武吉を聘し、大に之を擴張せしが原土の配合宜しきを得ず、自ら京都に行き諸家に寄食すること一年餘、其の術を悟り、歸來原土の配合、藥品の調製等に意を注ぎ、漸くその實を擧ぐるに至れり。

皆野村の窯

秩父郡皆野村の窯は、明治十七年の開窯に係る。是より先、明治四年川澄喜太郎、東京向島の鳥居京山に陶磁の業を習ふこと三年、會津に至て石燒の傳を得、諸國を巡遊し十六年信濃更級郡小坂村塚本治兵衞の窯の廢れたるを興し、十八年秩父郡皆野村に歷遊し來り、地質の陶器に適するを見、此に開窯し、日用の雜器を造る。此の地や、四圍みな山岳にして、運搬交通の利に乏しく、隨て陶器の如き、從來頗る高價のものなりき。然るに、此の陶窯にて造れる陶價の廉なりしを以て、地方の好評を得、販路廣まり、漸く成功の緒に就けり。

常陸

水戸燒

水戸燒は一に後樂園燒といふ。國主德川公の庭窯にして、後樂園中に造られたるものなり。其の創始の年月を明にせずと雖、恐らく文化前後に始まりしならん。製法は專ら交趾風に傚ひたる樂燒の一種にして、極めて上好のものなり固より賣品にあらざりしを以て、世上に遺れるものは極めて罕なり。落款には水戸國主の落款多く、後樂園と印したるもあり。

笠間燒

笠間燒は、天保年間今の西茨城郡笠間町の一部手町にて製せしものをいふ。同地の山口勘兵衛之を創始し、日用雜器を造れり。子勘重之を繼ぎ、嘉永年間稍〻販路を擴めたりしが、身老ゆるに及んで、殆ど廢絕に歸せり。明治三年、其の子松之助之を興し、爾來引續きて今日に及べり。

同じ笠間町の石井に、田中友三郎なる商賈あり。各地の陶場を巡歷すること

十年、明治三年始めて陶窯を起し、山口勘兵衛の制に倣ひ、一歩改良を施したる花瓶、置物、その他日用雜器を作り、東京其の他の近縣に販路を求む。殊に茶壺の出來甚だ巧にして、明治十四年第二回內國勸業博覽會の出品に對して、褒狀を受け、海外より註文多きを加ふるに至れり。

東茨城郡小川に渡邊淸右衞門なるものあり。筑前博多の人、小島月湖の來遊するに際し、月湖の製陶の技に長せるを見て、同地の土質を檢せしめ、試に飲食用雜器を造らしめたるに、質堅牢にして、品位亦良好なるものを得たり。忽ち附近町村民の購賣する所となり、明治十八年の共進會に出陳して、褒狀を得たり。

信樂燒の原土

古信樂種壺
籾などを蓄へ置く壺

近江

近江の地、上古より陶器を產し、醍醐天皇延喜五年、既に陶器貢進の班に列したる程なり。且つ地は京畿に接し、陶土を產することも多かりしを以て、自然に陶業の發達を見しものなり。されば、信樂燒、膳所燒を始めとし、比良燒瀨田燒、梅林燒、姥餅燒、水口燒、草津燒、湖南燒、湖東燒、丸山燒、床山燒樂々園燒等、世に知られたるもの甚だ多し。

信樂燒

信樂燒は、近江の南偏、伊賀に接するの地にて、大戸川の上游なる信樂谷に產する陶器の總稱なり。信樂谷は今多羅尾、長野、朝宮、小原、雲井の五村に分れ、陶窯は多く雲井村の牧、黃瀨、勅使にあり。原料は黃瀨、朝宮及び小原村の西を最良とし、谷中至る所に之を出せり。

信樂燒の創始は、今を距る六百二十餘年前、弘安年間、長野村に於て製出したるものに係る。然れども、當時は僅に種壺、浸種壺を造りたるに止まり、未

紹鷗信樂
利休信樂
宗旦信樂
遠州信樂 空中信樂 仁清信樂 新兵衛信樂

だ茶器には及ばざりき。後世之を古信樂といひ、質粗にして砂を含み、甚だ堅硬なり。釉は褐黄赤にして、その上に透明なる淡青釉を斑に施せるを上等の品とす。

後二百五十年を經て、永正年間、信樂の工人、始めて茶器を製す。時に武野紹鷗あり、點茶を以て世に鳴る。信樂の茶器を見て、深く之を愛翫す。因て此の時代の作品を紹鷗信樂といふ。

天正年間、點茶の宗匠千利休、亦信樂製茶器を愛す。世人利休愛する所のものを以て、利休信樂といふ。

寛永年間、點茶の宗匠千宗旦、亦信樂の茶器を愛す。宗旦愛する所のものなりしを以て、宗旦信樂といふ。當時小堀遠州あり、亦點茶を能くす。自ら信樂の工人に命じて、更に一種の茶器を造らしむ。其の製法漉土を用ひて、肉薄く精巧を極む。世に之を遠州信樂といふ。又京都の陶家本阿彌空中、野々村仁清新兵衛等、信樂の土を用ひて、諸器を製したるもの、之を空中信樂、仁清信樂新兵衛信樂といふ。

寛政以後、長野の谷井直方、神山の高橋春齋等盛んに茶器の製作に從事して好評あり。神山は今の長野村の一字なり。

元和八年、徳川幕府命じて腰白、附耳の茶壺を造らしむ。世に之を信玄壺といふ。蓋し、武田信玄の好みたる形なればなり。信玄壺は、上釉は首部茶色、下は白なり。長野村よりは、禁裏又は幕府へ陶器献納の古例あり。久しく茗葉を貯へて、香味を變せざるは、此の信樂燒を随一とすと稱せらる。長野以外の諸村よりは、油盞、燗壜、茶碗、油注、佛具の花瓶等を造るに過ぎざりしが、近年他の諸村の作品多く世に出で、長野は却て現はれざるに至れり。また黄瀬の人伴藏なるもの、獨り磁器を造ると雖、附近日用の需要に止まり、多く世に出でず。今は專ら土瓶類を輸出せり。

信樂の特徴

各種信樂の特徴

總じて信樂燒には萠黄は無く、黄藥を普通とすれども、時代によりて多少の差違はあり。

紹鷗信樂も、利休信樂も、土味は同樣なり。紹鷗は色黒みありて厚作なれども、利休は色赤みありて薄作なり。尤も利休信樂は、その以前よりありたる品の中、赤色薄手のものを好みて、選り出したるものなれば、時代は寧ろ利休の方古きなり。

宗旦信樂は、白土の上に一層華麗の釉を顯はしたるものにて、紹鷗、利休の

好みに比すれば、際立ちて見ゆるなり。
古信樂の中には、黄藥の胡麻に出たるがあり。
信樂燒に下駄歯と稱するものあり。器の底に二字の屐歯形を印せるをいふ。
これは時代の若きものなり。
信樂燒に新の字を彫りたる茶入あり。これを新兵衞といふ。これは備前の新兵衞にもあらず、京窯の新兵衞にもあらず、伊賀の新二郎が、信樂土を用ひて燒きたるものなり。
信樂近來の燒に、萩に似たるものを萩といひ、薄作りのものを仁淸無印といひ、淺黄藥の朝鮮に似たるものは、御本と見違はる。

下駄歯

萩
仁淸無印

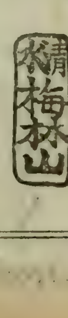
膳所燒

膳所燒は、遠州七窯の一にして、近江滋賀郡膳所に產する所のものなり。寛永年間、膳所の城主石川忠總、小堀遠州の教示に隨ひ、工人に命じて茶壺を作らしむ。其の質茶褐色にして、黒釉を施す。或は高取燒、丹波燒等に似たる所あれども、土質の重濃なると、釉水の精製なるとによりて鑑定を異にす。而して其の作品は獨り茶器に止り、總じて薄作にて、口造り、捻返し、景、茶溜り、

梅林焼

絲切は皆申分なく揃へるものを上品とせり。忠總卒して後、窯廢絶に歸せり。

後百五十年を經て、天明年間、膳所宮川町の人、小田原伊兵衛なるものあり茶臼山に窯を築き、梅林山の土を以て陶器を作れり。世に之を梅林焼ともいふ。梅林又は梅林山の印を刻し、香合、火入鉢、皿、花生などを出せり。その製する所のものは、交趾焼の法に倣ひ、土質赤色を帶びて柔ゝく、上に交趾風の釉を施し、各種の色を以て、鼈甲焼の如きもの、又は無地に黄釉のみを用ひ、一見黄南京の如きものあり。何れも高尚ならざれども、精巧を極めたり。梅林焼は間もなく中廢せり。





次で、光格天皇の御宇に至り、膳所の工人再び此の地に業を起せり。然れども、その製品は舊製のものに劣れり。爾來傳へて今日に及べり。

比良焼

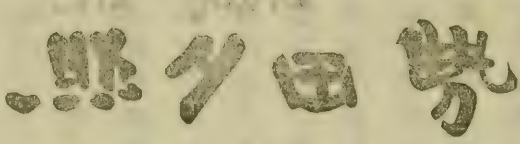
比良焼は、近江滋賀郡木戸村の北、比良山の麓にありし窯より出せしものをいふ。其の創始は明かならずと雖、比叡山に三千坊のありし頃、既に陶器を製せしこともありしならんとは、永樂保全の隨筆に載する所なり。同隨筆に據れば

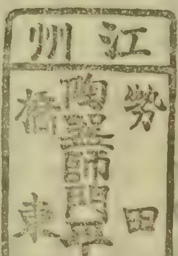
慶安の頃既に茶碗山、茶碗畑の名あり、其の後廢絶して、再び窯を開きしや、否やを詳にせずと雖、嘉永年間の頃までは、同所の邊に茶器、酒器の類を燒くものありしことは明かなり。而して、其の製品は、或は御本に似たる所あり、或は仁清の風に似て、草花を描くに呉須又は鐵粉を以てし極く薄作に造り、精巧なり。尻の臺裏には必ず下に掲ぐる如き印の中何れかを印せり。

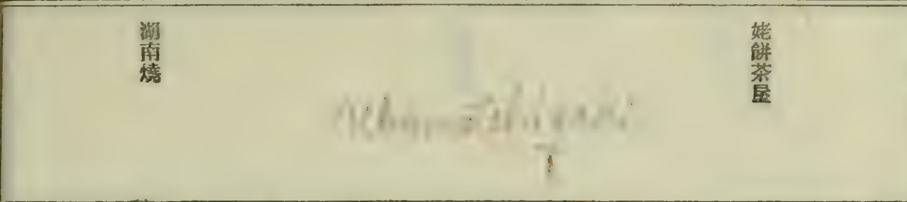


瀬田燒 又勢田燒に作る

瀬田燒は、其の初め詳かならず。寛延、寶暦の頃、膳所の藩士某勢田別保に窯を築き、陶器を造りたるより現はる。後天明年間花臼山の南雀ヶ谷に窯を轉す。因て一に後雀谷燒とも稱せり。その後を續きて、小田原伊兵衛なるもの、陶器を燒き、梅林の銘を印して世に出したること、膳所燒の條に述ぶる所の如し。作品に勢田夕照、または上掲の印を刻せるものを見る。作は上好のものにあらず。



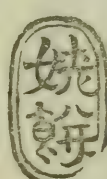


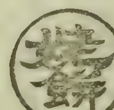


姥餅茶屋　　湖南燒

姥餅燒

江州草津の名物姥餅茶屋の裏に窯を設けて、陶器を出したるものを姥餅燒といふ。其の創始明かならず。或は曰ふ、該家の近傍に窯ありしと、また或說に據れば、名物姥餅の名を世に弘めんが爲に、同家の主人、家庭に窯を築き、陶器を製して之を商ひ、また同家の器物に之を用ひたるものなりともいふ。その作品は全く精巧ならず、又雅致にも乏しく、概して梅林燒に似たる所多きより察すれば、恐らく同時代のものならん。その他黑釉の茶器なども、往々散見し

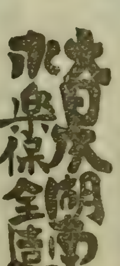




器の裏には上揭の銘を印せり。また之と同時代のものと思はるゝものに、草津の銘を印せるものを見る。作は上好ならず、雅致も乏し。

湖南燒

湖南燒は、永樂保全江州石山の邊、長等山の土を取りて製する所のものをいふ。その製造は京都へ持歸りて造れるものともいひ、或は長等山に窯を開きたりともいひ、何れ

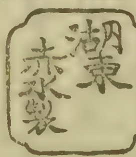


が異なるかを詳にせず。作品は磁器染付多く、裏面には湖南に於て永樂保全之を造るの意を記せり。

湖東燒

湖東燒に關する諸說

湖東の印を捺したる陶器今猶は現存するもの多しと雖、その創始及び年月に就ては、諸說一として詳かならず。或は犬上郡古澤村古城山（石田三成の城址）にて、文政十二年始めて造りたる陶器をいふともあり。又天保年間尾張大森の五郎なるもの、彥根侯の招きに應じて來り、御用品を製したるものをいふともあり。當時永樂善五郎も亦彥根に來り、赤畫金襴の法を傳へ、其の他諸國より名工を招き、畫工には鳴鳳、長崎幸齋、自然齋などあり。土は古城山以外に、その北方の大洞山よりも採掘したりといふ。また一說には、井伊家の窯なりしも、中興以後、市民の島屋平助なるもの、之を支配せりともいふ。今廢絕してあらず。







又一說あり、天明の頃、彥根の藩士某、仕官の餘暇、好んで製陶を試み、藍畫磁器を製すと雖、淡白にして意の如くならず、幾年研究の後、遂に白磁器及

丸山燒

水口燒

樂々園燒

び異形の香爐を製するに至る。其の質堅硬なり。而して、支那呉須、赤畫釉の如き畫中に、赤、靑、綠、黃等の釉を施し、聊か金泥を加へ、品位雅致を保てり。寛政中藩主の命を承け、一種發明なる赤釉に金泥を付し、新に白磁斑模樣ありて、一見金襴樣の如きものを造る。頗る高尙にして精巧なりと。

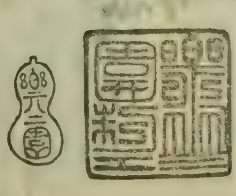
湖東燒廢れて後、嘉永年間に起りたるものに、丸山燒といふものあれども、其の詳細は世に傳はらず。

水口燒

文化、文政の頃休齋と稱する茶人あり、江州水口に住し。古物を業とし、又好んで陶器を造る。時々信樂に到りて陶業を視、意匠を凝して製出せる所のもの、大に雅致あり。當時世の賞讃する所となり、伊勢、尾張の地方に多くの愛翫者を得たり。製品には休齋の彫銘あり。

樂々園燒

樂々園燒は、彥根藩の御庭窯なり。何れの頃に創始されたるものなるやを詳にせずと雖、水戸の後樂園燒と一對の香合ある



草津燒

床山燒

を見れば、恐らく文化文政前後のことならんか。固より藩主の樂とせられしものにて、賣品にあらざれば、多く世に出でず。作品は茶器、香合を多しとす。

草津燒　床山燒

創始及び傳統の明かならざるものに、草津燒、床山燒あり。前者は姥ヶ餅燒に似たる所あり、恐らく同時代のものならん。餘り上好のものにあらず、又雅致に乏しけれども、裏に草津の印を欵せり。後者は寛延、寶曆の頃ならんともいひ、寛永年間のものともいへども、現存するもの少く、且つ多く無名なるを以て、鑑別に苦む。

延喜の陶器調貢國

美濃

延喜の昔、美濃より陶器を朝貢せしこと、史に載せられ、美濃は陶器國として、古來其の名高かりしも、其の何れの地たるやを明かにせず。然れども、地質は由來陶土に適し、且つ尾張瀬戸に近接せるを以て、瀬戸窯に原料を供給すること、古來相絶えざると共に、藤四郎一族の來て新に陶窯を開けるものあり尾張新製の起りてよりは、美濃の陶業は一層盛んとなり、開窯の個所も多く、良工輩出し、製品亦夥しきに及べり。然るに、常に尾張藩の嚴制を受け、其の藏元と稱する名古屋十二陶商の手に蒐集せられて、關の東西に輸送されしが故に、美濃の諸陶器は、瀬戸燒の中に包括せられ、時人皆瀬戸製と同視し、美濃燒の名は曾つて世に顯はれざりし。維新以後、此の制解かれ、貿易亦盛んとなり、自由に販路を求むることゝなりて、美濃燒の名始めて、世に出で、其の製品亦一定の聲價を博するに至れり。

今日一般に美濃燒と稱するものゝ中に、陶窯ある個所は土岐、惠那、可兒の三郡に亘り、二百に餘れる窯を見、外に不破郡赤坂町に産する温古燒、岐阜市

に產する金華山燒を加ふれば、一年の產額二百五十萬圓以上に達し、その六割は米國に、餘は支那、朝鮮に輸出さるゝこととなれり。また盛んなりといふべし。

美濃燒

美濃燒の產地

今日の美濃燒は、土岐郡多治見町、笠原村、妻木村、下石村、駄知村、泉村土岐津村を中心として、同郡の諸村、惠那、可兒の兩郡に跨りて產出することは、前既に述ぶる如くなるが、抑もその起原を溫ぬるに、永祿、元龜の頃、瀨戶の加藤四郎左衞門景春六男を生む。その次男與三兵衞景光、天正二年の春、今の土岐郡泉村大字久尻に來り、淸安寺の後山に一窯を築き、陶業に從事したるに始まる。當時土器に淡黃の白釉を施せるものにて、之を白藥樣と唱ふ。

織田右府の朱印

嘗て茶器一個を織田右府に獻せしに、右府激賞朱印を賜ふ。後隱退して僧となり淸安寺に住し、七十三歲を以て寂す。景光三男あり。長子四郎左衞門景延、父の業を紹ぎ、諸弟と謀りて淸安寺の伽藍を修築し、領主よりその功を賞せられ筑後の稱を賜はる。

後陽成天皇の朝、正親町上皇景延の製品を徵す。景延白藥の茶碗を上つる。

筑後の朝日燒

上皇之を嘉賞し給ひ、勅して筑後の朝日燒と名づけらる。爾後毎年之を貢獻し、慶長二年七月五日筑後守に任せらる。時に唐津の浪士森善右衛門、清安寺先住一閑の親族たるを以て、此の地に來り、景延の製陶を見て、大に其の得失を論じ、景延を伴ひて、唐津の窯法を視察せしむ。景延歸國の後、邸内に一窯を新設し、唐津の法に傚ひて、陶器を新製す。精巧雅致他に優れ、大に好評を得たり。他の工人等之を模せんとしたれども、景延四壁を高峻にして、容易に窺ふことを得ざらしめ、人の強て閲覽を請ふも許さず。

新製窯の秘法探究

偶々瀬戸赤津の工人一策を案じ、某々相携へて新正を景延の家に賀す。酒宴酣なるに及んで、赤津村松原太郎藏の子仁兵衛をして、窃に壁を越え、其の窯狀を探知せしむ。景延之を覺り、怒て之を追ふ、然れども、之が爲に唐津窯を築くもの、赤津その他に現はれ、景延の子孫繁衍して、多治見、市之倉、妻木、下石、駄知、其の他の諸村に分住し、陶業漸く盛んなるに至れり。

窯株

是より先、元祿中幕府窯株の制を定め、御冥加永と稱して僅少の税を課せらる。時に多治見、笠原、久尻、下石諸村の窯數を二十四基とす。後笠松郡代鈴木紋三郎在職の時、少しく增營して、新株四基を加へ、又惠那郡大井に四株あり、文政年間西浦圓治の讓り受けたる時は、都合三十二株となれり。

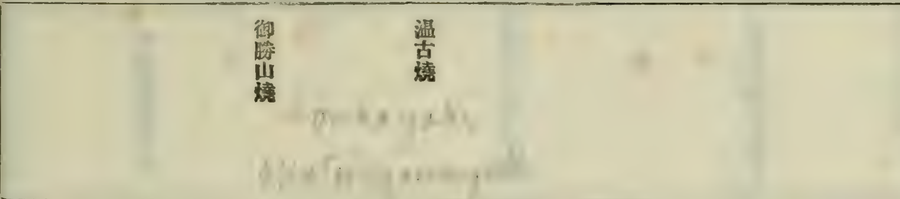
美濃燒磁器の始

文化元年、大坂の陶商西川屋茂平なるもの、肥前製奈良茶碗、及び蕣花狀の茶碗を齎らして、多治見村に來り、之を見本として茶碗を造らしむ。是れ美濃燒磁器の始めにして、其の原料の粘土を蛙目と稱し、下石村の浦山、土岐口村の砦山に之を取り、釉料に用ふる長石、卽ち廣目石と稱するものは、萩原村笹の平、ノガ坂、神野村、小里村、ノカヲレ山、久尻村の深澤、其の他三河國の諸村に取る。又蛙石卽ち鳥屋根石と稱するものは、多治見村の鳥屋根、及び原山、妻木村のハシカス、及び崇禪寺等に取る。初めは近傍諸山の紺青を採りて畫料とし、僅に青華磁器を製せしが、今や青磁其の他の彩器を造り、且つ錦窯畫を施すに至れり。蓋し、文化元年は加藤民吉の肥前より歸りて、瀬戸新製窯を開きし時代なりしを以て、此の地亦その餘響を受けたりしなり。

海外直輸出を開く

爾後磁器の製出は、引續きて今日に及べるものなるが、皆日用の小器に止まり、尾張、肥前諸窯の如く、巨皿大瓶を出すこともなく、又美術上の製品もなけれども、明治以後名工吾助現はれて、頓に其の名を揚げ、また此の地の豪家西村圓治、率先して海外直輸出を試むるに至りてより、海外への輸出品、安價なる日用器具を出すこと夥しく、日本三大陶器地の一に數へらるゝに至れり。

土岐郡駄知村に於ける美濃燒の創始は、文化元年、今の源右衞門の祖父、塚

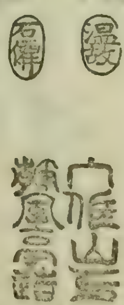


御勝山焼　温古焼

本源右衛門なるもの、同村松本山に産する二種の粘土を質とし、小里村の石粉肥田村上洞山の産土、方言水落と稱するものゝ二種に雑灰を和して、釉料となしたる絲目土瓶、松皮土瓶を製したるに始まる。天保元年、岩村藩主松平能登守、陶商長谷川半七に命じて之を専賣せしめ、以て岩村物産の名を負はしむ。當時頗る繁昌を極め、工人夥多ありしが、後磁器の盛んなるに及びて、漸く製磁業に轉せり。

温古焼　又温故焼に作る

温古焼は、不破郡赤坂町の人、清水平七なるもの、嘉永年間赤坂に開窯し、萬古焼に倣ひて、茶器、酒器を造りたるに始まる。當初同地金生山の赤土、御勝山の白土を和合し、無釉赭褐色の細小具を製し、御勝山焼と稱へたりしが、後温古焼と改む。温古は平七の號なり。一代にして絶えしも、弟勇助石仙と號し、明治二年別に一戸を爲し、河野忠次（大雅と號す）と共に其の業を繼承し、温古の稱を以て、今日に及べり。印には赤坂、石僲、温故、大雅等あり。

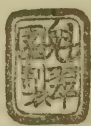


金華山燒

岐阜市稻葉山の麓にある陶窯をいふ。稻葉山一に金華山と稱す。明治以後の創始に係り、茶碗、皿、急須、德利等の日用雜器を製出す。

魁翠園燒

海津郡高須町の城主松平氏の庭窯なり。其の始めは詳かならざれども、恐らく文化文政の頃ならん。質は赤土を以て、花蟲等を描けるものあり。一見萬古に似たり。器の裏に魁翠園の欵あり。固より寶品にして緻密滑軟、上釉を施すものあり。又上釉なきものには、上畫釉にあらざるが故に、世に甚だ稀なり。



澁草燒

芳國社

飛驒

澁草燒

飛驒大野郡高山町に産する陶器をいふ。同郡清見村嘉平林に原土を採り、吉城郡神岡村戸谷より出る磁土に木皮灰を和して釉料となす。その創始は、元和年間京都の工人源十郎なるもの、大野村大名田村江名子に築窯したるに起る。此の窯一代にして廢絶し、文政中高山町の細江三郎右衛門なるもの、大名田村西之一色の小糸に新窯を築きたるも、久しからずして衰ふ。天保年間瀬戸の工人戸田柳造なるもの、飛驒郡代豊田藤之進の奨勵に依り、大名田村上岡本の澁草に築窯して、赤畵陶磁器を製す。之を澁草燒といふ。

柳造歿後、澁草燒漸次衰頽し、數年にして廢す。明治十一年高山町三輪源次郎、平瀬市兵衛、阪田長五郎、永田吉右衛門の四名相謀りて、此の陶場を購ひ新に一社を組織し、芳國社といふ。芳國社にては、陶磁を兼製す。陶器は灰色中釁の青華器を佳とし、磁器は近來改良を加へたり。然るに、結社以來の成績甚だ擧らず、苦窳破裂頗る多く、爲に資金を耗費し、十三年、十四年に至りて

組合員漸次離散し、今は三輪源次郎一人となれり。而かも源次郎の熱心なる少しも之に屈せず、獨力之が持續に努め、十五年に至て、徑二尺餘の平碟を造り之を東京博物館に獻せり。此の器付するに、淡青磁の稱を以てせり。同年九月吉城郡細江村の鮎見山に蛙石を發見し、谷石及び美濃惠那郡苗木村の產土を加へ、其の釉は栗灰に換ふるに、檮灰を以てし、十七年九月始めて白磁を製するを得たり。爾來刻苦精勵を加へ、益田郡下呂村に良石を得て、青磁を作出するに及んで、漸く改良の緒に就き、今は產額も增加しつゝあり。

益子燒

吉六燒

下野

芳賀郡益子町に大塚啓三郎なるものあり。嘉永六年同町の大津澤に陶土を發見し、之を試みて好結果を得たるを以て、爾後その業に從ふもの漸く多く、引續きて今日に及び、土瓶類を主として製造せり。而して、その販路甚だ廣し。

下都賀郡松沼村に大木新一郎あり、明治十二年以後、東山義政公の傳を以て土器を造りたるも成功せず、十五年春會津の人武井楢亭に東山燒の傳を受け、刻苦製陶に從事せり。

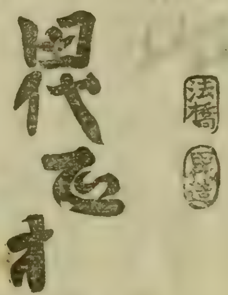
下野に吉六燒なるものあり。和蘭陀藥に似たるものにて、色釉も美しく、吉六造の印を附せり。吉六は割烹の技に長じ、俗謠を能くし、諸事器用なり。安政の頃、仙臺侯に抱へられ、百人扶持を給せられたりといふ。菓子器、茶碗、水指等を造りたるも、永續せざりき、産地は下野安蘇郡佐野町なりといふ。

相馬燒の起原
狩野尙信走馬を描く
相馬爪形

磐城

相馬燒

相馬燒は、慶安年間磐城中村の城主相馬義胤、其の臣田代五郎左衞門に命じ京都野々村仁淸に就き、御室燒の陶法を學ばしめ、居ること七年、藩に召還し陶窯を中村に築かしめたるに始まる。質は砂交せにして、粗造のものなり。當時狩野尙信中村に來遊するや、藩主の需めに應じて、



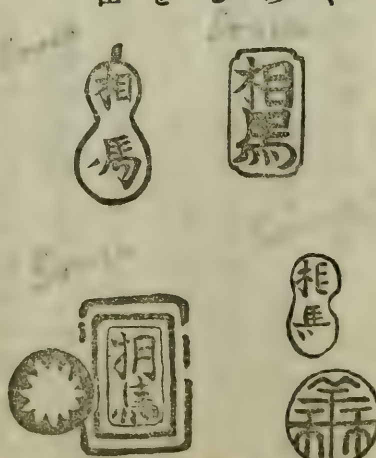
燒靑を用ひて、抹茶器に走馬を描く、蓋し相馬氏の徽章に因めるなり。爾後累代業を傳へて二百六十年、以て今日に至れり。天保十三年京都禁中御所より、相馬燒献納を命せられ、抹茶碗大小三十六個を献上するや叡感斜ならず、多くの御下賜品あり。慶應三年再び御用命あり、菓子皿一個献上せり。此の時田代法橋の印を下賜せらる。爾來法橋の印を用ふ。いづれも砂器に走馬を描き、又馬蹄狀を爲すもの多し。即ち世に相馬爪形といふもの是れなり。印は其窯所によりて多樣に分る。今其の二三を例示せん。最古のものにあ

磐城焼

大堀、井手、小野田は今大堀村に合す。

りては、走馬を描かず、且つ無印のもの多く、間々相馬氏の紋所九曜を銘せるものも見ゆ。

相馬焼は、雙葉郡大堀村にも製せらる。多く日用の粗陶器なり、同村半谷順之助の祖休閑の創始に係る。天祿の初年、休閑の家奴左馬なるもの、同郡井手村美し森に砂土を發見し、之を休閑に告ぐ。休閑竟に陶業を起し、又之を近在のものに敎ゆ。爾後漸く盛んに、大堀、井手、小野田の三村に亘りて、陶工百餘戸に達せり。



藩廳之を賛けて、新に陶器役所を置き、又江戸、函館に販賣店を設けて、大に保護振興に努めたり。爾來引續き今日に至る。

相馬焼には、前記田代、半谷兩家の外に、近藤あり。休閑より業を承け、技大に顯はる。天明八年近藤陶吉郎藩主より七人扶持を給はり、男陶助青磬印元形の土瓶を造り、今工尊景の世、慶應元年白掛土瓶を造り、共に好評あり。

相馬焼は一に磐城焼といふ、其の古作の茶人は、志戸呂焼に似て、黄土、黄柹の交り薬を用ひ、絲切見ごとなるものあり。

岩城

會津燒

會津燒の祖

會津燒は一に若松燒といふ。正保二年、水野源左衞門なるもの、美濃より岩代若松に來り、領主松平正之に仕へ、年米五十俵を賜はり、尋で大沼郡本鄕村に移住し、初めて陶窯を開く。之を會津燒の祖となす。爾來十世業を傳へて今工水野多門に至る。

次で、天明年間佐藤伊兵衞なるもの、白染付陶に志し、刻苦改良に努め、會津白陶の礎を開く、寶曆の頃手代木幸右衞門、佐藤の傳を承け、白燒を擴め、爾來兩家累世今日に及ぶ。

白燒會津

爾來業を傳統するもの甚だ多く、明治以後に至りて、岸傳藏なるもの出でゝ白堊白釉のものに密刻の紋理を施し、又青華を以て、山水、人物、花卉等を描ける、極めて密なるものを出し、大に世の好評を得、白燒會津の名をして、洽く世に知らしむるに至り、近年諸國新陶中、最も精巧なるものと稱せらる。

會津燒を製するものに、此の以外今工に、黑川和平、遠藤平太、岩田新吉、

本間山吉、大竹義四郎、山中房蔵、榊原尾治等あり。又上繪燒付を業とするものに、田母神壽次郎あり。多くは明治以後の開業に係る。

二本松燒

安達郡二本松町に、萬古模造の陶器を出す、其の創始を詳にせずと雖、明治以後、製造器械を据付けて、製出販賣せり。急須、德利、酒器等の雜器を造り、雙松、新月軒等などの印あり。

岩代には、此の以外、南會津郡田島村、岩瀬郡長沼村、安積郡福良村等に、粗糙の陶器を産す。

陸中

奥州の地、古來陶器を産せず、明治以後、諸國に新陶起るに伴れて、三四の勃興を見たるも、特に著しき發達を見たるものなし。陸中に於ても亦然り、今その概況を略説せんか。

東磐井郡折壁村大字下折壁の小山文三郎は、今を距る四十餘年前京都に遊び樂燒の法を田中吉左衛門に承け、歸來同郡藤澤村本郷に産する粘土を取て創製すといふ。

盛岡市仁王町の宮田謙次郎は、巖手郡米内村大字上米内、紫波郡煙山村大字赤林の土を用ひ、巖手縣勸業場内の陶窯に就き、明治十四年より雜器を製造せり。

稗貫郡花巻川口町南萬町目の古館忠兵衛は、四代前の創業にて、原土を同地四本杉に取り、高取燒に類せる雜器を製せり。また、同湯本村大字臺の小瀬清志は、四十年前同村饅頭山の土を用ひて、粗糙の磁器を製せり。

陸奧

此の國砂器の創製は、中津輕郡清水村大字下湯口の石岡林兵衛に起る。文化三年羽後北秋田郡十二所町より陶工を聘し、下湯口の扇田に一工場を設けたりしも、粗糙の擂盆、德利等を製するに過ぎざりき。天保六年舟師の筑前より來れるものあるに謀り、同國の陶工五郎七なるものを迎へ、改良に改良を重ねて漸く世の需要に投ずるものを出すに至れり。原土は同村及び相馬村、南津輕郡大鰐村大字早瀨野等に取り、頗る高取燒の趣あり。今工林兵衛は其の子にして巧手と稱せらる。

羽前

最上郡新庄町大字金澤町の涌井彌瓶なるもの、天保十三年を以て、同地金澤山の土を取りて、日用粗陶を造りたるに始まり、爾來其の子彌瓶業を紹ぎ、刻苦業に勵み、明治六年美濃陶器の法を傳へ、同郡萩野村朴澤小以良川等の白石を用ひて、青華磁器を創始す。その製品は、美濃青華磁器の如く、透明質にあらずして、却て京燒に類するものありといふ。

羽後

南秋田郡旭川村大字保戸野の佐伯孫九郎なるもの、羽後には由來陶産乏しく寺内其の他二三ヶ所に、雜器の產出あるも、茶具等の製造なきを憂ひ、各地の土石を試みて、寺内村山中の赤土、新藤田村の粘土、川邊郡手島村の青色粘土を取り合せ、萬古に類する瓦器を創製し、旭川村大字泉に一窯を築き、明治五年岩代二本松より、萬古模造に經驗ある村田鐵之助を雇ひ、且つ桑名に派して萬古燒の製を傳へしめ、歸來士族の子弟五十餘人を募りて、此の業に就かしめ明治八年鐵之助を解雇し、十五年自宅に窯を移し、以て今日に及べり。又十五年八月より同郡岩見山、仙北郡神代村卒田、雄勝郡山田村、平鹿郡八澤木村同川西村袴形等の原石を用ひ、岩代會津、美濃多治見より工人を雇ひ來て、種々研究を重ねたるも好果を得ず、十七年九月其子貞治會津に赴き、中村衆三郎を伴ひ歸るに及んで、稍々面目を改むるに至れりといふ。

鑑定備考日本陶器全書巻之二終